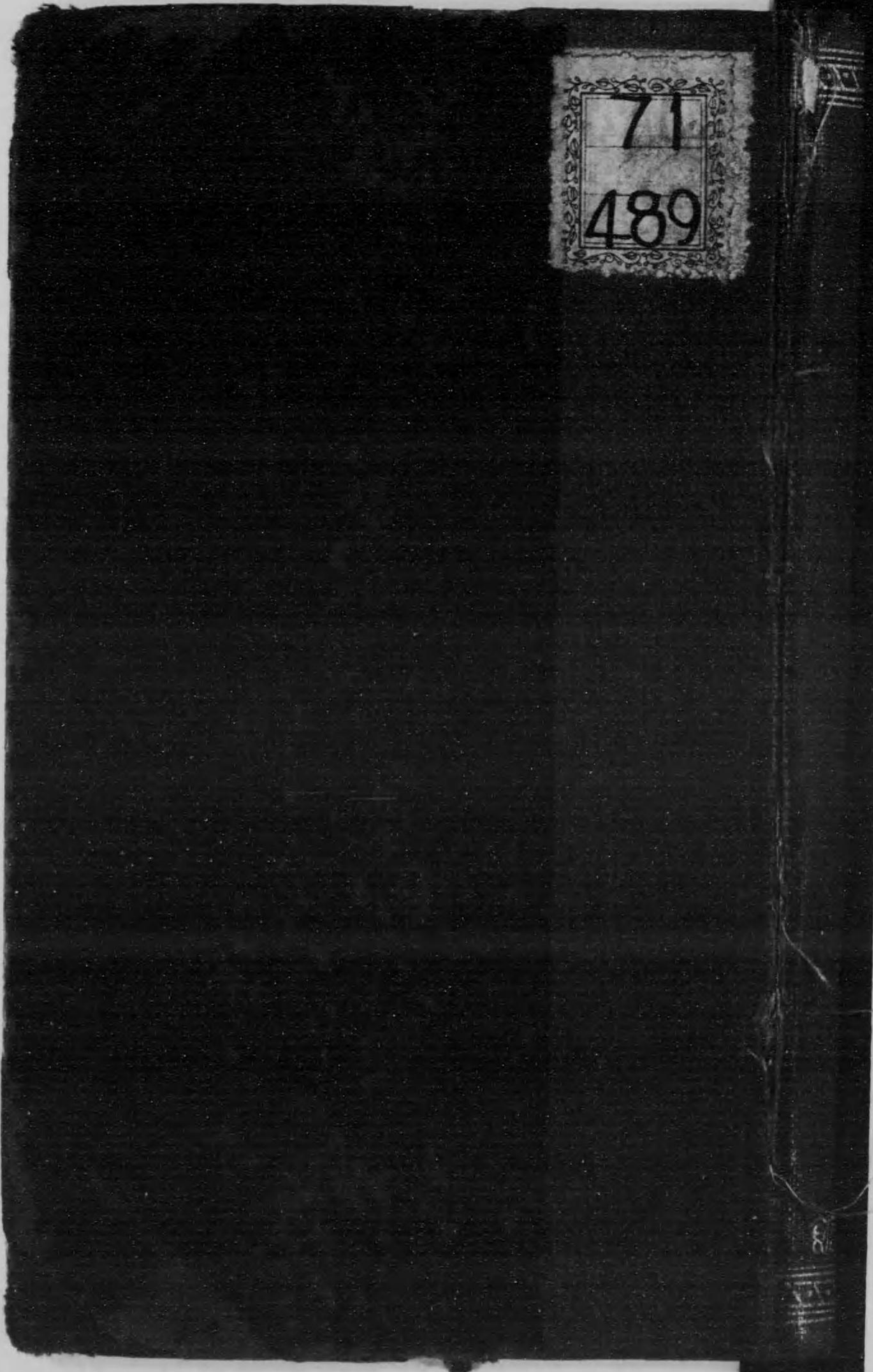


始



71  
489



30

71-489



廣文堂全集卷之三

大正  
4. 2. 19  
購求

大正  
4. 2. 19  
購求

目次

一 上田力 ..... 一

一 上田力 後編 ..... 二五

一 上田力 續編 ..... 三五

一 倉橋幸藏 ..... 六六

一 倉橋幸藏 後編 ..... 五〇

一 倉橋幸藏 續編 ..... 六五



浪六全集 第貳編

浪六著

71-4-89



其一

窓やぶれて紙に簫の音を聞き廂かたぶいて居ながら月を見るとは古人の風流、黄金かやいで身に光りを放ち美人を擁して寐ながら花を看るとは今人の榮華、いづれか快にして人事の性なるべき、かれは浮世を捨てしにあらすして浮世に捨てられたる無用の腐れ儒者が悲鳴に等しき窮巷の負け惜しみ、これは志節を遂げしにあらすして浮雲の富に乗じたる無恥の當世

上田力

紳士が夢に等しき泡沫の樂しみ、されば彼も與みせず好まず是も欲せず羨まずと、風雅でもなく洒落でもなく、また詮術なしでもなく詮術あるでもなく、唯これ斯くの境涯は今日かくの志節あるものに應ぜりとて、満都百萬の靈を厭ひながら往來不便の山にも入らず、都の一端に沿うて四季ともに絲竹紅粉の舟遊たえまなき隅田川の片邊り、日夜大俗の熱鬧を呼び迎へ呼び送る淺草寺の鐘の音を耳にして、汐入村の茅屋に苦學難業を重ねし五人男さても其後いかになりけむ、おのゝ散じて茲に六年、あばれ書生が散々に棲み荒せし古巢は連も再び人間の用に叶はずとて、家主の阿爺が算盤珠を弾いて思ひ切つたる一刀兩斷の所置に、たゞき潰して大八車二輛の古材木とし、あはれ千住の湯屋に賣り飛ばせし代價わづかに三圓五十六錢、あとの空地は村の小野心家が借り受けて竹の目垣を結びつゝ、豚小屋とぞなしぬ、夏草や兵どもの夢の跡、豚小屋や豪傑どもの屁の匂ひ、あゝ己んぬるかな己んぬる哉、い

やしくも當世紛々たる俗書生と志節を殊にして苦學慘憺たる我黨が記念の茅屋、それも自然の風雨に揉み潰されて昔日しのぶの草の露に蟲の音をきくほどの事ならば、また却つて今昔の感ふかく無量の興を催すべき基ともなれど、これは何たる情なや、その形見の家臺骨は再び人間の住家にならずとて凡俗の男女が垢を洗ひ落すべき錢湯の薪とせられ、しかも劣等動物として醜の醜たる豚の足に踏み汚さるゝとは、遺憾この腸を斷つと叫ぶや否、おもはず大のステッキを振り上げて折しも脚下に來れる豚一頭を打殺し、忽ち飼主に捉へられ閉口頓首、やうく一圓の謝罪料を差出して遁け歸りしは誰ぞ、川上にあらず倉橋にあらず黒田吉田にあらずして、例の上田先生力の君が汐入村懷舊の曉を訪ひし時の事なりける、

五人のうちの旗頭として隨一の先輩に推されたる川上三吉は、苦學十年さらに面白からずと一たび都門の風塵を脱却して自己が故郷なる紀州熊野の奥に立歸りつゝ、あたらず有爲の生涯を我から抛つて、あはれ猪猿を相手の獵師に身を終らむとせしが、こゝに上田力が満身の友誼と雙眼の熱涙に引き出されて再び世俗の人となり、しかも曾て汐入村に情を贈りし濱町の紳士富田正次に見込まれ、その愛娘が花の如き容姿と珠の如き心の戀に迎へられて竟に其家の婿となり、かの黒田健次は例に依つて例の怪物、立退狀一札を壁間に張り付けて紅塵百尺の眞只中に飛び出せし後は、殆ど半狂亂に等しき闇雲飛び乗りの本藝その身の利となり害となりつゝ、得失こもく浮世の風浪に漂うて成敗いまだ定まらぬのみか、お島といへる丸ほちやの世話女房を携へて偕も其後いつこに何をやるやらむ、野心勃勃々、あたるか中らぬか鐵砲玉と等しき本性に引替へ、これはまた小心翼翼たる倉橋幸藏、その始めは新聞の論説家と

して世に立たむとせしが、一朝さらに轉じて官海の人となり、今は若手の高等官中に其名を知られ、五人のうちの年少者たる吉田雄藏は富田家の食客たりしより、川上が婿となりし後は優に學資を與へられて今なほ致々たる法學生となりぬ、されば以上四人いづれも往く道は異なれど、まづ志のあるところを歩みつゝ行ひし中に、たゞ一人こゝに上田力は昔ながらの上田力なりける、

身材五尺七寸、うまれながらの筋骨あくまで逞しくして二十三の曉は體量すでに十九貫目に及び、膂力よく普通の男四五人に敵し健脚また日に行くこと二十餘里、頭髮は太く逆立ちて幾度か梳れども櫛の齒に従はず、黒漆に似たる濃き眉の下に圓かなる兩眼を光らして、怒れる肩は山の如く、張れる腰骨は白の如く、三冬の嚴寒にも東天の空に氷を踏み碎いて冷水を身に浴び、盛夏の炎天にも大道を潤歩して流るゝ汗を厭はず日を避けしことなく、珍味なく

とも鹽を舐めて飯を喰ふこと一日一升、與ふれば琉球の泡盛を嗜みて下物もなき大盃に甘露々々と舌鼓をうち、また世間なみくの下戸を驚かして顔色も變せず、恰もこれ宛然たる一個の古勇士、風貌の勇健なるは斷崖絶壁を攀ちて猛獸を手捕にすべき勢ひあれども、人しれぬ心の底は處女の如く物に感じ小兒の如く事に泣きつゝも、天真爛漫の性をりく自然の滑稽を帯びて俗人の意表に出で、光風霽月に等しき胸中おのづから凡人に飛び放れて高く清じ、しかも浮世の萬事に疎くして當世名利を追ふの術なけれど沈思黙考して一條の道理を求むること敏く、おのれが所信を執つて動かざることも盤石に似たれど、忽ち過つて改むること水の流るゝが如く、憐れむべし斯好漢不幸にして五百年以前の人たらず、いたづらに邪智奸才の横行せる今日の俗界に生れて所謂當世才子がために愚物とせらるゝ、されど愚は其愚を守りて才を恃める才子を墮若たらしむる事あり、

上田力、元來この性をもて二十五の曉いづこに當世の家をなすべき、おのれが故郷なる備中の山奥より荷ぎ出せし手製の大ステッキ、もしこれを自己が性に反せる當世俗物の眞向額に打ち込まずんば、當世俗物が談笑の間に含める陰險の毒刃をもて竟に殺さるべき男、たゞ幸ひにして殆ど世塵の外に等しかりし汐入村の苦學難行に伴ひ、今また川上三吉が敬愛の下に保護せられて生を保てばこそ、

ところは兩國橋を渡りて本所小泉町の裏屋ながら、仕入の花簪を内職とせる老夫婦が二階を借り受けて只一人自炊の氣樂さ、月々十五圓を贈りくる川上が芳志は厚く受くれど、其うち三圓内外は毎月の餘分とて必ず返しつゝ、さらに心は萬金の豪奢に譲らざる意氣軒昂、をりく三尺四方の二階窓より長髯なき關羽に似たる赤ら面を差出して、悠悠たる蒼空を身上げながら何をか快と叫び、また遙に蟻の如く往來せる大道の俗物どもを見下して何をか奇



と叫びぬ、

其二

心こゝに疚しからずして大なれば際涯なき天地これ我物なり、人間たとひ手足を伸ばせばとて疊一枚を出でざれば身を置くに六疊の二階住居は餘りあり、さるを紛々たる當世の俗物みだりに志を得たりとて何をかする、汚れたる浮雲の財を抱いて日夜危懼せる胸中は間斷なき煩惱に責められて轉輒煩悶しながら、いたづらに浮世の虚飾を争うて本邸の別荘の妾宅のと騒ぎまはる見苦しさ愚かさ哀れさよ、金谷園裡の春の榮華も野に咲ける一輪の草花に及ばざるを知らずや、近くはあの兩國橋を渡るものに幾千萬、されど其中に一人の我と等しき無垢清淨の男やある、皆これ醜惡の形づくりて動けるもの、天下通川の金銀を多く得むがために奔り、火に焼かば忽ち灰となるべき家庫を得むがために狂ひ、萬人一様、裸體を蔽はむがた

めに衣服の美を競ひ肥馬輕車の有無を誇る、まして日夜もろくの犯罪を發けば必ず鏡花水月に等しき戀の奴、嗚呼なんとやら浮世は嫌なり、願はくば此一身の形骸を早く脱して心意の活動のみを長く萬世に残し、しづかに冷かに中有より下界の利害得失を試み人間の成敗消長を見物したしと、其日は既に暮れ果て、夜に入れども上田先生さらに默然として火をも點さず、夕飯の腹加減を忘るゝにあらねど今となつては頗る面倒なりと、まッ闇がりの二階に唯一人ほつねんと先哲めいたる折しも、梯子段に人の躓首して、「やア上田、居るのか、居ないのか」

聲は正しく其人と知りながら、上田いよく平然たる體、筒先の弱りし流れ弾丸の如く暗闇の中より靜に聲を放つて、「川上だな、ハ、ハ、ハ、ハ、當時の社會すでに暗黒たるを知らば何ぞ俄に此二階の暗闇たるを怪しまんだ、乞ふ手探りに這ひ寄り給へ、しかし梯子段を踏み外して

落つべからず、御用心々々々』「これさ戯談を止して火を點けんか、石油がないのか」『石油も  
 ありマツチもありだがね、つい夕方から考へ込んだ事があつて其まゝ今に及びりさ、ちやアま  
 づ世俗に従うて卑しき人工よりなれる眼前の光明を放つべしか』いひつゝ二分心の豆ランプ  
 に火を點せば、川上三吉なほ梯子段より首のみ差出して笑を含みしが、やうく上り來りて  
 坐しつゝ、『何を考へて居るのだ、また例の通り自己流の哲理かね、その哲理も宜いが、時に  
 今夜ア少々君に相談があつて來たのだから、ゆるく談さうよ、しかし夕飯は、まだか、今  
 ごろまで随分ひどいね、一升飯の君にして能く腹が持つよ、それなら何か美味いものを持ッ  
 て來れば宜かつた、實は今日、君に來て貰ふ筈だつたがね、ごたくと家族の多い家だから  
 却つて迷惑だらうと思つて、散歩かたくさ、ちやアこれから何處か奢らうかね』「いや、そ  
 れに及ばん、飯は一升五合の土鍋に猶いまだ三分一より少からず二分より多からざるの間を

餘して副食物には金山寺味噌、ちよいと失敬するよ』いひつゝ片隅より大の土鍋を取出して  
 書物箱の間に忍ばせし箸と茶碗、竹の皮包みよりは金山寺、前なる机を膳として脇目も觸ら  
 ず茶も吞まず、肩を怒らし脰を張り大口あいて、むしやくと喰ひ始めたる上田が面體、行  
 脚の貧僧が思はぬ他國の食に逢うたるが如し、

なみくの男ならねば満面かくるゝほどの大茶碗に山の如く盛り込んで六七杯、固より其間  
 は無言、ぱりくと囁む古澤庵の音を最後として、やうく箸を措き火鉢にかけたる土瓶の  
 腹を掌に試みつゝ、やア湯がぬるいと俄に摺り寄りながら、さらぬも不出來の面を膨らして  
 一息に火を吹き立てたる灰神樂、ぱつと散れば川上おもはず顔を反けて、『ひどいね』『わづか  
 火鉢一個の灰神樂に驚いて、さすがの男おもはず袖屏風の優しい風情、嗚呼いつの間か貴公  
 子めいたぞ、但し可憐なる細君の命によるか、ハツハツハツハツ時に細君近來どうだ、この



障子びしやり、其ま、奥へ走せ入れば猶かつ可なれど、そつと障子の影に潜んで隙間より僕の形勢を窺ふ體、ステツキの振りやうでも悪きやア忽ち飛び出さうといふ覺悟だね、第一この乃公を本所の殿様たア冷罵の極だね、殆ど罵り得て妙だな、しかも憎らし氣に喋々と淀みなき流水の駄辯さらに妙、いはゆるお清大明神だ、彼の如きは下女の大勳位と謂つべしだ、  
 糞はくば他日あの女が良人となるべきものを見たい、アツハ、、、、『  
 罪も報いもなき上田が例の放言に、川上おもはず膝を打つて高笑ひしながら、『なんだ君、馬鹿々々しい、よせよ、高が下女一疋、齒牙にかくべきものでないさ、しかし彼女に能く言ひ聞かせて置かう、時に今夜わざ／＼来たのは外でもない、かうして他人の二階住居に、いつまで不自由な自炊するより、どうだね、僕の家へ來ちやア、打明けたところ、賓師の禮もしくば珍客の配膳を以て迎へる事は出來ンが、世間の所謂る食客もしくは厄介者たる冷遇は斷

じて仕ない、まづ家族同様、さらに隔心なき親戚ぐるゐの覺悟で』や、ありがたい、芳志は感謝するに餘りあるがね、僕ア矢張り此まゝで結構だ、あらためて言はずとも上田が性は由來の交情、具さに君が知るところ、たとひ君が一家族をして骨肉に勝るの慈愛懇切を賜ふとするも、元來この武骨漢、この不通漢、逆も尋常一般の他人間に居れないよ、その理由は演ぶるに及ばず、唯このまゝ此まゝ、これさへ君が賜物だ、身に取つて過分の恩、いたづらに受けて空々寂々と徒食するは深く恥づる次第、また濟まない道理だから、近々のうち何とか工夫して我は我だけの職分、といふも大業だがね、ハ、、、、どうか曲りなりでも自立獨營の道を考究しつゝある最中だからね』いや、さう固く出られちやア却つて此方が迷惑するよ、たゞつい心易う、手軽にね、いはゞ自己が家の中で書齋を代へるやうに、宜いぢやアかいか來たつて』その心易いが竟に心易からざる浮世の常、その手軽いのが他日の手重くな

べき端緒だ、上田力かく月々の恩恵をうくる事も、かの富田正次より直接なら御免を蒙る  
 た、我性を知り我愚を憐れみ我志を疑はずして多年刎頸の友たる君が手よりの恩恵なれば  
 こそ喜んで受けるのさ、渴して盗泉の水は飲むが、飢ゑて明りに他人の食を乞はざる上田力、  
 こゝが即ち當世人たる能はざるの頑冥、こりやア殆ど僕の宿痾だね、ハ、、、、『そこは  
 分つてるよ、わかつてるよ、今更言はなくつても宜いさ、しかし君、よく考へてね、君と僕  
 と交際するの以前、すでに阿舅たア知合の間だらう、また今日この三吉が妻となつて居る富  
 田の娘は、かつて君が郷里にあるころ、學校よりの歸途に誤つて殆ど水死せむとするを助け  
 た君だらう、ね、そこで富田正次の父子がために君は正しく再生の恩人だ、まして今この僕  
 が其父を舅に持ち其子をつまに持った今日、一家族相議して聊か君に報いむとするもの、さら  
 に恩惠的にあらずして義務的ともいふべきだ、敢て他なし、たゞ君をして長く此窮巷に居ら

しむるは我々が心に濟まない事と、まづ斯ういふところから迎ひに來たのさ、もし來た上で  
 嫌なら、また直に歸るさ、わかたか』なるほど、よく分つた、しかし分るほど猶更ら行か  
 れないよ、たゞ謹んで淺からざる君が一家の好意を謝するのみだ、願はくば僕の頑愚を一笑  
 に附して今まで通り、此まゝ頼む、ハ、、、第一あのお清大明神が恐れるよ、かつまた上  
 田力いかに野暮漢といへども人間凡夫の悲しさ、木石ならぬ耳目に君等夫婦が日夜の喃々を  
 聞かされて堪るものか、ハツハツハツハツ』  
 川上の心中、角を矯めて牛を殺し翼を作つて鳥を害ふの愚に倣はずと雖も、この上田を家に  
 迎へて朝夕談笑の間に其性を和らけ其意を慰め、近來しきりに傾かむとする極端の人生觀を  
 打破し、おもむろに導き靜に伴うて取捨折衷の勞を取らむとせしが、頑として應ぜざるのみ  
 か、なほ此上に強ふれば月々の贈與をも謝して去らむとする勢ひに、流石の川上も持て除し

上田力

て苦笑ひしながら、『ちやア今夜の事は互に言はず聞かずと仕よう、いゝかね、時に明日の晩ちよいと来ないか、夕飯を食ひ旁々、過日あるところから貰つた小鳥の味噌漬で』『往かう、さういふ簡単な好意なら何時でも辭せずよ、必ず行く、が、まてよ、あすの晩か、いや〜その時の都合にするから待たずに居つてくれ、用意なんか仕ちやア困るよ、たゞ飄々浪々、進退に依つて心を煩はさず出入に際して時を定めぬが僕の不文法だから、ハ、ハ、ハ、』『どうしても相變らず君だよ、ちやア歸るから、なるべく明日の晩ね』『よし〜今夜の僕アまづ行く覺悟だが、あすの晩の僕は保證の限りにあらずだよ、歸つたら細君に宜しう』『しかと申し聞けまするだ、そして君、あすの晩に来るなら一泊の覺悟で来るべしだよ、ハ、ハ、ハ、やはり獨身は氣樂だね、どこで不意に泊つたつて家に待つものなく恨むものなしさ、あゝ我も竟に斯言をなすの人となりにけりか、水の流れ譬ひ急なるも境は常に靜なり花落つること頻りなりと雖も意は自ら閑なりといふ古人の名句に恥づべしだ、ハ、ハ、ハ、』

其三

あすの夜は必ず来よとて立歸りし川上の心中、さてはこの我を一家族の中央に押し据ゑて義理づくめに引き取らむとの計略、しかも一泊せよとの深意は飽くまで我を説いて窮巷を脱せしめむとの芳志、身に餘つて嬉しけれど、我天生そも〜當世一家の組織に對うて圓滿なるべきものならず、されば今の我を救はむとする人々の慈愛は却つて後に我を捨つるの基となり、我また今の慈愛を喜ぶの念いつしか去つて怨恨を抱くの果とならむ、人いづれか神ならむ、浮世は凡て佛の蓮臺ならずと、上田力、元來の智者ならねど其心に一點の利慾なく邪執なければ自ら先見の明あるに等しく、また時に應じ境涯の分を守りて悠々寛々さらに動かざる體は殆ど識者の用意あるにも似たりける、

さればその翌夜も二階の一室に閉ぢ籠りて、薄闇き豆ランプの前に例の沈思黙考、圓かなる眼を半眼に閉ぢ獅々鼻の息を殺して、宛ら今戸焼の土達磨を宵闇の棚に載せたるが如くなれど、誰か知らむ、このところ先生さらに得意の體、人生もろくの煩惱を脱して貴賤貧富の外に心のまゝを通はせつゝ、をりく白癡が物を拾ひし如く、唯にやくくと笑ひ、また人なき野原に金殿玉樓を望みしが如く、忽ち眉を擧めて何をか怪しむ風情、愚といはむか狂といはむか悟れるか迷へるか、こゝにこの一怪物が端坐無言の折しも、下より宿の老爺が聲として、『上田さん、お客ですよ』

四條五條の橋の上、往き來ふ人を深山木と見るほどの觀念この我にあれども、奈何せむ、近來の俗物は古昔の俗物より温順しからずして無遠慮千萬なるが故、しばく哲人の定坐を汚すの恐れあり、さても今夜の客は何者ぞ、川上ならば其ま、無言に上り來べき筈と思ふ折しも、また下より老爺が聲、『上田さん、起きてるんですか寐てるんですか、お客ですよ』『いや起きてても寐ても居らんが、まづ懺た、ともかくも其容を上げてくれ、出迎ひ大儀といふなア世人の履き違へで、ありやア先方からの挨拶でなく此方から言ふべき言葉だよ、大儀々々、わけて今夜ア大儀だから客人そのまゝ來るべし、全體だれた、誰だ』

みしくと音する梯子段に誰ぞと見れば、机の上の豆ランプに照らされて二階の上り口へぬツと差出せし顔は南無三寶お清大明神、『おや上田さん、御免あそばせよ、お客は妾なの』『やア君、いや君ぢやアない貴様、でもないぞ下女、こりや下女、富田の下女、全體な、何の用だ、俗物も俗物、さらに頗る大々的の大俗物女が失敬千萬、け、怪しからんこつた、御免あそばせよ、とは何だ、遊ばせ言葉が似合ふ面かい其面は、もし川上の用なら其處から其ま、

言へ、決して上る事ならんぞ、一寸でもセリあけてみる畜生、僕のステツキ、こゝにはないが豫てより汝の眼底に映じてある筈だ、さア用事を言へ下女、ば、馬鹿ッ』

まんまるの目に角たて、面を膨らしながら、前なる机に兩の拳を打揃へつゝ、胴より作りつけの太き首骨、ぎゆうと音するばかりに捻ぢ曲けて睨みつくれば、お清も釣り上げられたる河豚の如く番臺面を膨らして、あるまなきかの細き目に巾著口の紐を解いたる勢ひ、『おや、おや、上田さん、ひどい事を仰ツしやるわ、誰が貴方の許なぞへ來たいもんですか、御主人の御使ひなればこそですよ上田さん、また妾の顔さへ見ると下女々々ツて、なるほど下女には相違御坐いませんが、これは餘所のお給金を頂戴いたします下女で、貴方の御召使ひとは違ひますのよ、はい、ステツキかビステキか其やうな御馳走は御無用に遊ばせ、いえもう貴方いたゞきましたも同然、ホ、ホ、ホ、馬鹿は深川の名物で太々神樂の大黒様は芝の神明

と小石川の傳通院、ホ、ホ、ホ、』や此奴また笑つたな、全體その笑ひ聲が汐入村以來の癪に觸るのだ、えッ太々神樂の大黒ちやアない畜生、太々的大俗物と言つたのだ、お丹珍め』

『お丹珍でも宜しう御坐いますから、ともかくも主人の用を申しますわ、しかし此ま、梯子段に立ちながらでは餘り失禮、御免あそばせよ』

『また遊ばせよか、こりや下女、そこで宜いから早く用事を吐して歸れ飄碌玉』

『おや、今度は飄碌玉ですか、いろんな名をつけて戴いて嬉しいことよ』

『嬉しい事よ、よ、よとは何だ、よとは、そも、よなる言葉は、おい、無闇に上ツて來ちやア不可ンといふに、こゝこれさ下女、けしからん女だ、こりや下女、家宅侵入といふ事を、あれ、や此女め、づう、づう、しいッてば、不埒千萬、いやしくも、この上田力をいへども委細かまはずお清そのまゝ差寄ツて大道白に似たる臀を火鉢の前に下せば、ことし二十貫目の大男おもはず飛び退きぬ、



あれは元來あんな男、たとひ何をいふとも心に毒なければ勘忍せよと、川上夫婦に言ひ含められたる今宵のお清、口には争へど腹に持たず、其まゝ進み寄つて、携へし風呂敷より重箱を差出しながら、「主人が申しました、今夜は是非おいで下さるかお待ち受けましたが、もはや夕飯の時刻も過ぎましたから、前夜お約束のものを届けますつて、これは上田さん、鳴といふ小鳥のお味噌漬ですよ、めし上つて御覽なさい、そりやア貴方、なんともいはれない結構な風味ですぜ、ちよいと今こゝで焼いてあげませうか」がらりと打つて變りしお清が俄の愛嬌に、さすがの上田も張合のぬけし心地、さりとして今更ら笑顔も見せられねば、一切すべて啞の如く、たゞ無言に首肯のみ、さらば焼きませうかといへば、また無言に頭を打振つて入らぬ世話との體、果は願もて其處へ其まゝ置いて歸れとの眼色に、お清おもはず吹き出して上田の面體じつと見詰めながら、「ねエ上田さん、貴方と妾とは根からの仇敵同士でもな

いに、何故まア斯うでせう、よく／＼性が合はないんですね、その證據には、これまで度々いくら喧嘩をしても、あとで考へると呵しい事、お腹の中に何にもないのよ、おや、また、よと言つちやアお氣に觸るかも知れませんが、眞實ですよ、あらまた、よと言つたわ、ホ、ホ、若御夫婦が然う仰しやいました、上田は見たところ鬼のやうでも心は佛だ、あれこそ今の世の中に珍しい男だつて、それに清お前は上田さんといふと、いつも失禮な事ばかり申し上げてさ、幸ひ今夜の使者には是非お前が往つて、ぢき／＼おわび仕て來いと、ホ、ホ、それで伺ひましたの、ねエ上田さん、實に只今までは濟まない事ばかり申しまして、しかし此後は屹と心得ますから、どうかねエ上田さん、ホ、ホ、」ばかりと折れて脚下より出直したるお清が言葉に、元來の一本調子、もはや無言の鼻息で追ひ歸しも得せず、しづ／＼ながら振り返りて、「わかつた、はやく歸れ」「おや、それでは貴方お許し下さいますの」

『さう言はれると僕の方でも、何となう氣の毒ぢや、ハ、ハ、ハ、まア宜いから早く歸ッて川上夫婦に宜しく言ッてくれ、いづれ其うち遊びに行くからッて、時にこの小鳥は此ま、焼いて宜いのか』『え、其ま、で宜う御坐いますとも、お味噌の味が能く染み込んで居ますから、なんにも付けるには及びませんの、しかし餘り眞黒に焼き過ぎては苦くッて折角の甘味がぬけますよ』『おいきた』『さやうなら』

上田そのま、坐も動かず見返りもせぬ耳朶へ、みしくくと梯子段を降り行く聲音、二段三段と思ふころ忽然きやツと叫んで、ごろ／＼ばかりどんと響きぬ、南無三寶と驚き起ッて見下せば、梯子段の下にお清が迂り落ちて呻く聲、宿の老爺が駆け寄ッて介抱しきりの體に、其ま、馳せ降りむとして上田また中段より足踏み外し、あツと思ふや否、さらぬも倒れて起き得ぬ背骨の上へ二十貫の大男としんと落ち重りつゝ、蛙を踏み潰せしが如く、ぎゆうといはせぬ、『しまつた、み、水だ水だ、おい氣を確固に持て、ど、何うだ何うだ、お清君しツかりしろ』

其四

かつては蓮の葉を頭にいたゞいて炎天の大道を濶歩しながら、日に新にして日々に新なるのみか、得るに易く棄つるに惜しからず、しかも自然の美と清涼の風流とを兼ねたる天下一品の我帽と誇りしが、寒風凛冽たる師走の空となりては、流石の男も露冷かなる天下一品に聊か避易しけむ、川上より贈られたる鍔廣のメリケン帽を面深に被りて、人は著流し著下すといへども、これは相も變らぬ布子一點を裾短に著上げつ著吊し、をり／＼結び目の端を引き出して布巾ともなり手拭ともなる天竺木綿の兵兒帶、晴雨兩用に通する枋齒の下駄、用なき左手を懷中に捻ぢ込んで、右手には例のステッキ、梟の如き眼をむいて重ね襪に似たる唇端を膨ら

せながら、悠然として立出づる大兵肥満、いづれも歩をとめて見返る中に、柳橋の雛妓三  
四人が舞踊の稽古がへりに見上げて、ちよいと御覽よ、萬一なな人に惚れられたら妾どう  
しよう、イツそ死んだ方がましだワ、

上田力、ふと小耳に挿んで、畜生、ふざけた小女郎だ、まだ人間卵子の殻を出たばかりの分  
際で、はや既に惚れる膨れると吐す、まして白日青天の下に堂々たる一個の偉丈夫を見掛  
けて、ちよいと御覽よ、あんな人とは何たる氣焔ぞ、イツそ死んで仕舞はむといふに至ッ  
ては一言ふかく他日の慨を知るに足る、蛇は寸にして其氣をあらはし、彼等いまだ乳臭く  
して紅粉の巷に馳驅せむとするの勢ひ、なるほど、やがて浮世の俗物どもが膽魂ひんぬか  
れて戀の奴となるも大に所以ありだ、紛々たる今日、當年の少年に彼女等ほどの氣慨なし、  
恐るべし怖るべしと思つて振り返れば、三人の雛妓は家鴨の雛に等しく小さき尻を振つて過

け出しぬ、

兩國橋を渡りて川端傳ひに濱町の富田が邸宅、真正面の玄關に向うて、「たのもウ、川上は居  
りますか」

いつも家内に鳴り響くは問はずと知れし其人と、まづ奥へ通ずれば、すぐ案内せよとのこと  
に、取次の小女いで、此方へといふ、上田しづかに首肯いて此時やうく懐中の左手を取  
しつゝ、おのれが家に歸りしが如く、すつと打通れば、折しも若夫婦は火鉢に差對うて何を  
か睦し氣の體、「やアこれは失敬、差支はないかね、どうやら唐突に神聖を犯したやうだね、  
かまはないか」

川上ふりかへりて例の洒々落々、ハ、と笑へば、妻の芳子も今年二十一、いつしか浮世馴れ  
たる女房氣取に良人が無二の親友を迎ふる如才なさ、「おや上田さん、よく入らッしやいまし



のまゝ不具にでもなつてみる、いかに過失とはいひながら、あはれむべし女一人の生涯を慮けたも同然の君だぜ、是非その不具どのを君が女房に持たすンばあるべからざるところだ、どうだね、あの清が不具となつて君に連れ添うた曉は、頗る奇だよ、妙だぜ』やアたまらないね、ハ、ハ、ハ、ハ、

をりしも芳子が立歸りて襖の彼方に手を支へながら、『それでは上田さん、甚だ見苦しくつて失禮で御坐いますが、どうか一度、見舞つてやつて下さいまし、本人は決して其事に及ばないと申しますが』承知、案内して下さい』

納戸と臺所の取合なる六疊の一室、これぞ彼が平生の天地かと障子引き開ければ、左右に壁と押入の正面なる半窓の下に、木綿なれど更紗形の厚き夜具を打被りて、枕頭には水薬と煎薬の外、小さき角火鉢に清水焼の土瓶をかけて茶器と菓子まで取揃へたる體、なるほど世間普

通の下女が部屋とも見えすして、奥と臺所の中央に彼女が平生の勢力を想像すべく、我等が本所の二階住居よりは遙に立勝りて、そつと何處やらに白粉氣の匂ふ風情、さすがに女なりけり、これでも人しれず朝夕の用意ありと思へば、

『やアお清君、どうだね、實に氣の毒千萬だつたな、随分と養生するが宜い、しかしまづ此分なら』土中を出で、天日に曝されたる芋蟲の如く、お清やうく肥大の身を蝨かしつ、枕を擽けて、『上田さんですか、ありがたう御坐います、なアに貴方、御心配に及びません』『さうさ、根柢のある病氣といふぢやアなし、殆ど南瓜の蔓が切れて落ちたと一般、いや、何、その何だ、こりやア失敬、つい比喩が悪かつた、だからよ、ね、すぐ今に全快なるさ、ハ、ハ、ハ、ハ、だから暢氣にして冷えないやう、あつたかくするが肝要だぜ、ついては此ところ何か見舞物と思つたがね、ハ、ハ、ハ、ハ、思つたばかりさ、上田だよ、勘忍しろ、おや、枕頭に甘さ

うな菓子があるな、自費か官費か但しは配下よりの賄賂か『ホ、、、いつも罪のない方だよ、よろしく召上れ』『しかし君が斯う寐て居つちやア、流石に僕だつて、よろしくも召上りかねるさ、ハ、、、、時に前夜は、さぞ痛かつたらうな』『そりやア貴方、梯子段の二段目から手鞠のやうに、おツこちたんですもの、痛くないことは御坐いませんよ、南瓜の蔓が切れて落ちたとは少々違ひますから』やア失敬々々と叫んで上田そのまゝ遁け出しぬ、

其五

一年中の大油断が今この時に押し寄せたりと、はや今年も盡きなむとする師走の世上、いつこも同じ脚下の鳥に驚いて俄に狼狽の體を見るに、あはれ一年十二箇月のうち十一箇月の統計よりも唯この一箇月間の犯罪こそ却つて多しとぞいふ、されどこゝに上田先生かの力の君は殆ど曆日なき別世界の境遇、敵に責めらるゝ年末の苦痛もなく、浮世の義理を飾る歳暮の

遣取もなく、さては其他の人生もろくの虚飾虚禮は一切すべて關せず焉と、六疊の天地に蟻ッて得意の朗吟を恣にし、三尺の机に對うて豆ランプの下に世界の大名も廣しとせざる意氣軒昂、その氣樂さに引替へて十坪に足らぬ同じ家の二階下には、主人の老夫婦が衣手うすき霜夜の更け渡るまで、たゞ差對うて花簪の内職に餘念なし、  
 回向院の鐘の音も今日このごろは、わけて無常に鳴り響く夜の十時ごろ、上田おもはず肱を枕に寐ながらの耳敏つれば、きゝなれぬ男の大聲にて何事をか喚く體、しかも主人夫婦が頻りに謝びて泣くが如く訴ふるが如き體、なほよく聞けば不意に押し寄せし債鬼なりける、

天下の經濟と社會公益の事業に要する金銀融通は格別、凡そ個人普通の間には借りて返さぬ奴も悪し貸して厳しく迫る奴も悪し、約束の期限が覺束なければこそ證文に印紙印形の面倒

ある世の中、また民事訴訟の執達吏のといふ騒動もある人間、そもく借りるほどの奴に未  
 來の心算を狂はざるものなく、貸して利を取るほどの奴に慘酷ならざる道理なし、あ、俗界  
 の俗物どもが煩惱火宅の憫れさよと思ふうち、いよく大聲に罵る債鬼の勢ひ、果は何を  
 か取って投げ付けし物音、主人夫婦が狼狽へ叫ぶ聲に、上田力たるもの今は何として安閑た  
 るべき、のそくと二階より降りて見れば、四十あまりの横髪禿けたる色黒の奴これぞ債鬼  
 ならむ、あはれ老の夫婦が三日がけの夜にかけて仕上げたる花簪の大箱ぐるみ引ッ抱へて  
 立去らむとするを、驚き慌て、左右より取緋る體、上田みるより物をもいはず飛び掛ッて、債  
 鬼が兩の肩口ぐいと引ッ掴みぬ、「やい待て、全體うぬ何者だッ」元來の大力に掴まれて思は  
 ず箱を取落しながら身動きも得せず、たゞ眼を白黒にして蟹の如く泡を吹きぬ、  
 主人夫婦も心の弱身に今は却ッて上田を慰めつ、やうくその手を放せば忽ち圖に乗る下

種の勢ひ、さらに大聲あけて叫びながら、「さア畜生、どうでもしろ腕力づくで人の金を踏み  
 仆すのだな、おもしろい、本所深川の場末かけて鴉金の山本といやア人に知られた男だ、地  
 獄の鬼に貸した文久錢さへ取はぐれのねエ乃公の金を、踏み仆すなら踏み仆してみる、また  
 腕力づくなら腕力づくで敵手になつてやらア、へ、へ、へ、體格の大きいのが怖くツちやア淺  
 草の仁王門を潛れるかい畜生、ふざけた真似を仕やアがるな破れ書生め、もう斯うなりやア  
 意地づく、鍋釜でも抜いて行くのだ、うろく、狼狽へて懸替へのねエ首でも抜かれやアがる  
 な」いひつゝ、またもや荒れ出さむとする襟首と腰帶とを引ッ掴んで、主人夫婦が止むるも  
 きかず、宛ら小兒の手鞠を抛つが如く大喝一聲、どツと猪轉抛けに抛け付ければ、かく  
 ても曲物あつと叫びながら忽ち大の字となつて、「さア殺せ、殺せ、殺せ、畜生、殺しやアが  
 れ」

よし殺してやるといへば、飛び損ねたる小田の蛙も一般、片脚あけて踏み殺すも易き奴ながら、さて殺しもならぬ今更の上田力、自暴自棄の大の字なりに喚く面體じろりと睨んで、をりしも幸ひの火鉢に沸え返る鐵瓶を片手に提けて差寄せれば、わつと驚いて忽然むくく跳ね起きぬ、『ハ、ハ、ハ、ハ、馬鹿め、殺せくと吐しながら沸湯が怖いと見えるわい、しかし、きさま、當家へ貸した金は幾何だ、十二圓七十八錢、むよし、ところで其金を僕が立替へてやらうか、但しまた其金だけを腕力づくで返さうか、どうだ、よく考へて返答せい』いひつゝ、猿臂を伸ばして胸倉ぐいと掴めば、内いきよつとして前後二度の大力に驚いたる上、大の字となつて嚇せば面上より鐵瓶の沸湯を浴せむとするほどの亂暴もの、うかく長居の場にあらすとや思ひけむ、とられし胸倉の拳に兩の手をかけながら、『なアに貸した金さへ取りやア別に文句もねエんだが、こゝの老爺があんまり分らねエからよ、ようがす、ようがす、

ソ、さう手荒く仕なくつても、ようがさアね』ちやア十二圓七十八錢で宜いんだな』ようがすよ』『確と宜いか、あとでまた、ぐづくいふと許さんぞ』『ようがすつてば、しかし今すぐに、全く返して貰へるんですね』『しれた事いへ、劣等動物に二の矢をつがせるか馬鹿、時に御夫婦、此奴のいふ通りですか十二圓七十五錢』『なに五錢ちやアねエ、十二圓七十八錢だ』『ハ、ハ、ハ、ハ、この腕で胸倉を掴んだ以上は、生死の境ともいふべき際どい中で、わづか三錢の相違を遁さる奴、や、逆も士君士の及ばざるところだ、ちやア十二圓七十八錢、これに違はないかね御夫婦、何、元金が七圓で三ヶ月の利足が五圓七十八錢だと、いやはや此奴め、しかし今更ら一文半通まけるとはいはぬ、が、冷血無残の極だ、非道酷薄の奴だ、あゝ世間幾人か此奴のために慘憺たる悲境に沈淪するものもあるだらう』おもはず拳に力を込めて突き放せば、顔色まツ青となつて物も得いはず苦しみぬ、



上田そのまゝ二階に走せ上ツて、幸ひ川上より贈りくれたる今月分の十五圓、年末の事なりとて別に十圓、あはして二十五圓を反故紙の如く引ッ擱ンで駈け降りながら、主人夫婦の前に抛け出しぬ、『そのうら彼奴に渡すだけ渡しなさい、なアに殘金は世俗の所謂る歳暮なるものさ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

夫婦は老の目に涙一ぱい、幾度か無言に押し戴き、其うちの十二圓に火鉢の抽斗より七十八錢を添へつゝ、渡せば、今更ら何をか不足の面魂、しぶく懐中の財布より證文を取出して金を請取りしまゝ、會釋もなく立出づる佞悍の相貌、上田しづかに見送りて小首を傾けぬ、『そもく彼奴等は何のために生きて居るか、ふしぎだね、全身これ汚醜の塊、さらに一點の香もなくツてさ』

左より夫婦が老の頭を疊に摺り付けて、さまざまに嬉し泣きの言葉を、上田うるさ氣に手をもて打消しながら、『そんな事は何うでも宜いさ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、時に夫婦とも随分よく稼ぐね、わけて此ごろは毎夜、一時になるだらうな』『へエ貴方、これでも足らず勝で困りますよ、私等も此老年になつて斯うも苦勞するたア夢さら思ひませんでしたが、不幸つゞきでねエ貴方、其上たよりにする子といふものが御坐いませんから』『なるほど、そんな面倒臭い事を聞くのが嫌ひだから、この二階を借りて二月になる今まで問ひもせなかつたが、むゝさうかい全く子がないんだな』『子がありさへすりやア貴方、また何とか工夫もつきますさ、勿論、姪が一人、兩親に早く別れました姪を幼少の時から娘分に致しまして、元來さのみの馬鹿でもなし十人並すぐれた容色で、まづ老後は此女にと考へましたが、もし上田さん、油斷のならないものは女の子ですよ、まだ男の放蕩者は焼直しの法もありますかね、年頃の女で氣の勝つた小才の走つた俠と來ちやア却つて困りものです、その姪の娘にした女が貴方、ふとした事か

ら喰詰書生の、しかも羽織破落漢に打込みましてね、まるで狂氣の沙汰、お談話になつた始末ぢやア御坐いません』む、さうかい、そりやア大變な酌違ひで困つたらう、しかし人生いづれも其通りさ、また姪なるものが慚愧後悔して立歸る時もあるだらうよ』ところが貴方、もう幾年といふ長の星霜を連れ添うて、諸方へ流れ渡つた曉ですから、どうせ似たもの夫婦の怖しい女になつて居ませうよ、ですから今こゝへ無事に戻つて來ても、なか／＼おいそれと入れるこつちやア御坐いません、第一その男といふ奴が焼いても煮ても喰へない惡黨で、現在おのれの舅も同然に當る私を、眞先に捉へて沸湯を吞ました上、ふかい處へ落し込みましたもの』む、書生にも當時そんな凄惨な奴があるかね、全體なんといふ男だ』行末の杖にしようと思つて仕込んだ一人の姪を取られましたばかりか、其ころ相應の下宿屋家業まで其奴のために潰されましたから、死んでも名は忘れず閻魔の廳へ訴へてやる覺悟、黒田健

次といふ奴なんです』

きくや否、上田力おもはず二十貫の大兵を身震ひして、宛ら死毒を舐めたるが如き滿面の苦痛『む、黒田、健次といふ奴か、け、怪しからん奴だ、む、不埒千萬な奴だ、ぶち殺しても宜い奴だな、うぬツ』

其六

封建制度の昔、交通不便の日本國中をたづねて親の敵を打ちし者のありしは道理なり、汐入村に五人相約して苦學難行せし中に、黒田一人その半途より飛び出で、爾來こゝに七年、おもひきや其黒田がために斯くなりしとぞいふ老の怨恨の涙に浮くばかりなる天井板一枚の上を、我ために悠々たる安眠の床として清淨潔白の腸を守らしむとは人事の複雑にして單純なる集散離合の漠として密なること殆ど神の業に似たり、さるにても黒田奴、彼奴が才氣

と膽畧をもて白日青天の下に大道を濶歩せば天晴れの男なるべきに、何ぞや自己みづから其才を曲け其膽を横たへて俗世闇夜の岐路に走るのみか、きけば生涯たゞ一人の妻とすべき女を取るにも先づ謀策を以てし、これが紫の朱を奪うて後、その舅たり、伯父たるものを欺いて家業を失はしめ、飄浪また飄浪、さても其後いつこを流れゆきけむとは佛徳の慈悲眼にも我黨隨一の罪惡、おのれ巧みに法網を免れ社會の制裁を脱して燕の如く飛び抜け鯨の如く跳ね廻るとも、この上田力が眼に見付け次第、忽ち骨に刻して腐りし腸の流れ出づべきステツキの一打撃を加へて、あはれ願はくば悪木の實を結ばざるうちに毒汁の花癩を叩き落しくれむぞと、例に依つて例の一徹心、其夜は眠りもせず、夜具ひツかついで曉までも病める牛の如くに呻りぬ、

上田が心中、おのれが血を分けし兄弟の罪を犯せし家にあるが如く、ましてや前夜の恩に感じて以來ますます我を厚遇する主人夫婦が、をり／＼黒田のことを口にして黒白の證據に引出さる、我身の辛さ苦しき、世間普通の血氣者に力を極めて胸に打たる、とも、猛牛の角を整す蚊とも思はぬ上田ながら、この老爺に黒田といふ二字を言はる、毎には満面の色を失うて其坐を起ちぬ、さりとて川上も今は昔の川上ならで一家組織の上に於ける川上が耳へ、かかる事を聞かせて心を煩はさむも無益なるのみか、憎けれど黒田奴は曾て刎頸の交り結びし一人、たゞ我胸一個に深く藏して、あはれ一時も早く廻り會はむとぞ祈り、

黒田健次に逢はむこと、汐入村以來の寄留届を傳うて、かつは餘所ながら警求むること眼前に易けれど、上田が性としては忍ぶべからざるの業なり、まゝ別來の浮世を渡りし素行を想へば、

かつて汐入村の古巢を出で、四人おの／＼新なるの時、我その跡仕末に出かけ

かば、幸ひの途上、淺草山谷の木賃宿に一泊の隣室を窺うて思はず黒田に出逢ひし、  
 彼奴が伴うたる一人の女、なるほど遊皮の剥けし二十二の女が、我に向うて仔細らしき  
 上、しかも黒田がために萬事かくなり果てし辯解に力めし女、あれこそ當家の老爺が姪なる  
 べし、南無三寶、あの時に其まゝ引ッ捕へて引き摺り歸り、川上倉橋と相談の上おもむろに  
 施せば、猶いまだ彼奴を救ふの道はありしならむに、今更なれど惜しき事してけりと、あは  
 れ斯好漢が玲瓏たる頭惱に近來一點の濁れる露を注いで、いはゆる先生得意の神韻縹渺を驚  
 かしぬ、

始めは何の縁もなく由緒もなく、たゞ二階貸いたし候といふ張札を見て借りし我、黒田がた  
 めに斯く落ち果てたるを朝夕の眼に見むよりは、こゝを去つて新なる他に轉せむとは思へど  
 も、また黒田が連れ添ふ女の親類然ときけば、いつ如何なる事より音信あつて彼奴が在所を  
 知るの端ともならむか、かつは我友のために欺かれたる老夫婦を我また餘所ながら無言の間  
 に扶けてこそ人間善道の一端ともなれ、さても天下の衆と與みする能はずして一人の悪友に  
 心を煩はすの愚は愚なりといへども、我は天下の衆と俱に事をなすの力なく、たゞ情に於て  
 一人の悪友を救ひ出すの力ありと、上田が一念、一入さらに宿の夫婦を慰めて自己の罪障消  
 滅の感をなしぬ、

其七

人間百年の生命を保つとして三萬六千五百日、これに四年目一度の閏を加へて三萬六千五百  
 二十五日、古來稀なりといふ七十にして二萬五千五百五十日、これにまた十八度の閏を加へ  
 て三萬五千五百六十八日、もし人生五十の通語を算すれば一萬八千二百五十日に十二度半の  
 閏となるのみ、其うち世間普通の二十歳までは唯これ池中の物にして、いはゆる社會の人と

なるべき成年以上より五十までの三十年間は一萬九百五十日、これを日夜に分ちて半を睡るとすれば僅に五千四百七十五日、其うち一日平均八時間の活動として朝夕の四時間を減ずれば四萬三千八百時間、これを日に數へて千八百二十五日間、また此中より三度の食事に要する時間は上層下層を通じて一日一時間として千八百二十五時間の日數七十六日餘、長短その性癖ありと雖も大小便を合はして廁にあること日に三十分、これを合して殆ど三十八日間、されば以上の千八百二十五日間より百四日の必要を減じて千七百二十一日間、嗚呼これぞ人間まづ正當の身を保ちて兩眼あきらかに世を渡るべき時日ながら、何とせむ人生の多くは徒勞懈怠にして僅々たる此千七百二十一日間さへ朝寐を過し宵寐に耽るのみか、春の花、秋の月、夏の轉寐、冬の晝炬燵、その他の物見遊山に幾何の時を費し旅行疾病また免るべからず、かつは無用の談話、不意の災厄、風雨の障礙、喧嘩口論、狂奔馳走、虛儀虛禮、さては世俗

一切もろくの徒費空亡を算すれば人間の生命それ幾何ぞ、わづかに三年前後、千日あるかなしかの短日月と思へば、かの大廈高樓も美衣美食も功名富貴利害得失また河童の屁に似たる世の中を、まして老少不定の身體髮膚が何の違あつてか戀の奴となり罪惡の巷とぞなる、智慧も學問も謀策も入るものかは、以上は小學の生徒なほかつ答へ得べき算數にして、人生わづかに此短日月を徳義の人となつて終ること實に易々たるべき筈を、俄の暴風に逢うたる蜘蛛の如く、わざしく自己が心の絲を掻き亂して狼狽へ騒ぐのみか、たゞ人間五十と稱する一言の勘定違ひに道の遠きを驚き、逆も叶はじとて狂ひ出す奴、荒れ出す奴、さては凋れ返る奴の哀れさよ、ハ、ハ、ハ、ハ、一切世俗の才と智とは是れ人間を攻め落すべき惡魔の器械なりとは、上田力か今年の正月元旦に雜煮の餅を喰ひ過ぎながら六疊の一室に伏し轉びて割り出したる統計論なりける、

胸前に支へし雜糞何の過食やうくをさまりて、只この統計論を腹に持ちながら家を出づれば、何が目出たいやら勘定違ひの奴等いづれも今日を晴と著飾りて、例の悪魔が器械に責められつゝ奔るシルクハットの肥馬輕車より、浮世の暴風に吹き抜かれて心の絲の掻き亂れたる蜘蛛野郎に至るまで、屠蘇に酔うて往來は織るが如き虚禮虚飾の眞只中を、相も變らぬ布子一點寒晒しの大兵を聳て、悠々また寛々と歩み出せし上田力、わけて今日は一際すぐれて目立ちぬ、

濱町の富田が邸宅も嘸や俗物虚禮の奴が充滿して面白からざるべけれど、川上が許に倉橋吉田の來會すべきは必定、さらば汐入村の我黨たゞ一人の黒田を缺くのみ、いさや襲うて大に目出たからぬ持論を吐いてくれむと、氷りし大地に下駄の齒音からころと響かせながら、往いて見れば果して門前市をなすの諺に漏れず、出るもの入るもの新調を競うて洋服和服

の混亂、宛ら鯨の背を見るが如く光れる中に、上田一人ぬツと蓬髮弊衣の大音聲「たのもウ」

例の上田さんと小女が叫ぶ聲に、お清大明神はツと思つて、平生は兎も角も今日は格別、一年中の人々が改りたる禮節群集の玄關を我物顔に、あの變物どのを長く立たせては當家の爲ならずと、忽ち馳せ出で、「おやく／＼上田さん、よく入らッしやい、さア此方へ」主人にも通ぜず其まゝ引き入れて川上が部屋に案内しつゝ、そツと勝手口より走せ廻つて上田が脱ぎ捨てし下駄とステッキを盗むが如く臺所へ隠しぬ、

上田先生かくと知らば大喝一聲、忽ち兩眼むきだして怒るべき筈ながら、しらねばこそ、川上が部屋に打通りて人なきを怪しみつゝ、火鉢引き寄せて待つ間ほどなく、お清また取つて返して「あの土田さん、甚だ失禮ですが暫時、親且那様は早朝から諸方へお禮廻りの御不在中

ですから、若御夫婦とも免れ難いお客様を、しかしお酒が出て居りませんから只今すぐで御坐いますよ』『ハ、ハ、ハ、ハ、さもあるさうづ、さもありなんこつた、時に今日、倉橋と吉田は來なかつたかね』『さやう、お二人とも先刻まで在らっしゃいましたが、貴方のお宿へ行くからつて』『しまつた、さうか、いつも僕ア出先を置いて置かないから、二人とも待つに待たれず去るに去られず聊か困つてるだらうよ』『なアに貴方、倉橋さんは此ごろの御身分、今日は綱曳の自用車でお急がしいから、なか／＼迎も待つて在らっしゃる氣遣ひは御坐いませんが、あの吉田さんは御存じの正直一片で書生さんの氣樂さですから、こりやア上り込んで待つておいでですよ』『さうく、倉橋も近來は器械で動く奴だからなア、しかし吉田は氣の毒だ、時にお清君、君も今日は改つて大變に化粧し込んだな、立派々々、二階から逆落しの滑稽を演じた時たア雲泥の相違だ、ハ、ハ、ハ、爾來なんともないかね』『ホ、ハ、ハ、これでも貴方、可

哀さうに人間の端ですもの、世間一般のお正月には洩れませんわ、おや、御挨拶を忘れたこと、上田さん、まづ新年あけまして御目出たう御坐います、舊冬は段々と、相變りませず、今年も宜しうお願い申し上げます』『やア失敬々々』

例の統計論を荷ぎ出して今朝よりの耳目に觸れたる俗世の俗物を罵り、以て大に目出たからぬ氣焔萬丈を吐きしが、酒は目出たきと目出たからぬに關せずとて、左右より川上夫婦が隙間なき洒落と愛嬌に強ひられ、お清も今日は平生の敵討この時なりと腕に糾かけて眞正面より攻め付けしかば、元來の底ぬけ上戸、シヤンペン葡萄酒ビール日本酒なんでも御坐れと引ッ替へ引き受けて、飲むほどに飲むほどに流石の上田も今は朦朧たる兩眼を押し据ゑながら聊か舌の根も亂れかゝりぬ、されど先生さらに心の一物を亂さず、頑たる本性いよ／＼

を得て鐵の如し、

やア酔ッたぞ、全く酔ッたよ、さらば歸るべい、いや〜呼べば應ふる川一重の彼方と此方、一泊するに及ばずと玄關に立出でしが、おのれの下駄とステッキなきを怪しんで頻りに四邊を見廻す體、お清はツと驚いて勝手口より携へ出でながら、『ホ、、、今日は大變なお客様で、もしや紛失いたしませうかと』『ハ、、、虚言いへ、乃公の下駄が今日の玄關にあツちやア頗る威嚴を缺くの恐れありとかの所以で、畜生、讒して以て何處の片隅へ流罪に處したのだな、や、かまはない、決して驚くに足らん、古今東西の歴史に於て小人しば〜君子を貶するは珍らしからぬ事だ、ハ、、、』『いえ貴方どう致しまして、そんな失禮なことを』『いや〜お清君にして斯の如きは猶かつ可なり、まして其意にあらざるを辨するは以て其罪を恐るゝに等し、今日の當世あの得意の馬鹿者どもを見よ、あらん限りの罪惡亡狀を極め

ながら恬として恥ぢざるの醜體、や、言語道斷だ、ハ、、、』

ぶらりと門を出づれば、はや夕陽かたぶいて、晝の虚禮に馳せ勞れたりけむ平生よりは俗物の往來いと稀にして、吹き送る川風の寒さも却つて酔顏に心地よく、蹣跚たる脚下に踏み鳴らす下駄の齒音も冴え渡り、つきならずステッキの大地は氷ツて瓶を叩くに等しく、吐く息の虹に似たりとは仙人めけど、酒氣紛々と空を仰いで吹けば白く煙に似たり、やア愉快、快なる哉、快なる哉、

朗吟かすかに兩國橋を渡らむとする時、橋の袂より我を追うて來る人影、ちよこ〜と小走りに過ぎ行かむとせしが過ツて我ステッキに躓くや否、どツと前に伏し轉びぬ、上田おもはず駈け寄ツて抱き起さむとすれば『いえ〜貴方よう御坐いますよ、妾こそ却ツて失禮をいひながら俄に起きも得やらぬ風情、よく〜見れば此寒天に足袋もなき眞白の素足、しか



も生爪を剥がして血を流しぬ、「や、怪我をしたな、こりやア悪かった」  
 薬はなし、せめて紙あるかと袂を探りつ、此女を見れば、傍らに抛け出したる一挺の古三味  
 線、せきざろと聞き及ぶ古風の編笠、衣類も肌寒き薄著の見すほらしきに似もやらで、暮れ  
 かゝる空に一際すぐれて白き横顔、憂きに亂る、鬢の毛、さては人の門に立って三筋の絲に  
 露命を繋ぐ哀れの女ぞと、をりしも袂にありし五十錢の銀貨一個、そつと取つて差出しなが  
 ら「膏藥代だ」

女やうく紙屑に爪先を巻いて、落ちたる三味線と編笠とを拾ひあけしが、銀貨は其ま、押  
 し返さむとするを、上田また押し戻さむとして、互に顔を見るや否、女まづ何とやら驚いた  
 る體に走せ出せしを、上田おもはず三步四歩おツかけて袖を捉へながら、「これさ持つて行か  
 ンか、行けつてば」「いゝえ貴方、どう致しまして」「そりやア不可ン、是非」「どうか、お放しな

すつて、々急ぎますから」「ちやア猶更ら早く持つて行け、行けよ、寸志だ」いへども夕暮  
 を幸ひに顔を反けて隠す風情、捉へられし袖ふりきつて遁け出さむとする體、袖乞同然の女  
 には不思議の女と思ふうち、上田ふつと忽ち心づいて猶更ら固く掴みながら、外れても相手  
 が相手、もしやと思ひ切つたる聲を潜めつ、「黒田、黒田の妻ちやアないか」いはれて更に  
 一入うち驚いたるまゝ遁け出さむと焦れども、芝居めいて主は其ま、片袖あとに残らねば、  
 女も今は叶はぬ瀬戸とや思ひけむ、やうく振り返りて小腰に差俯き泣聲を潜めつ、兩手を  
 合はせながら、「どなた様かは存じませんが、もし、萬一ひよつと黒田を御承知の方なら、ど  
 うぞ此まゝ、妾を見廻して下さいまし、これで御坐います、この通り、後生ですから」上田  
 おもはず兩眼の涙はらくと落せしが、捉へし袖の手は放さず靜に差寄つて、「いつか山谷の  
 木賃宿で逢つたもんだ、決して驚くにも足らん恥づるにも及ばない、今どこに居る黒田は、

身のため悪うせんから』はい、ありがたう御坐います、萬事は妾の此さまを御覽あそばして』  
 『そんな事は何うでも宜いさ、黒田は全體どこに居るのだ』い、え貴方、それを申し上げる  
 くらるなら斯やうに、かやうに手を合はして』やア困ツたな、しかし黒田の居所を知るまで  
 は、此ま、見通す事の出来ない理由があるんだから、それとも、僕の宿へ来るか』そりやア  
 貴方、御無理で御坐います、人を、人を泣かせるといふもの、御覽の通り、人様に泣かされ  
 ずとも、夜晝さんく泣き通して居ります身分で』さう、さう惨憺に言はれると僕ア實に  
 困るよ、が、是非、ぢやア斯うしてくれ、どツか此邊のね、あまり人の目につかない、料理  
 屋でも何でも宜いから』ですが貴方、妾の此さままで』そりやアカまは、其方にさへ迷惑  
 なきやア僕は更に無頓著だ』  
 お清の如きは例外、およそ女に對うては無口同然の上田、それも心の底に物あツて仔細ふる

にもあらず耽らうて堪へざるにもあらず、たゞ一切すべて阿魔は糞面倒なりといふ筆法より  
 の無口ながら、今は黒田に逢はむとする一念、思ひがけなき幸ひのお島を捉へて放さばこそ、  
 作うて棲家へ押し行かむか、従うて我宿に來らむか、それもならずば此邊の小料理屋とまで  
 打込みしは、斯人にして天晴の出来なり、

男も男、黒田ほどの男に連れ添うて浮世の浪風さまんぐに渡りぬいたる女、しかも生れて何  
 處やらに一風あるお島、今は所詮このまゝ、遁れぬ瀬戸際と性根を据ゑけむ、さらば妾が御案  
 内いたじませうと、兩國橋を立戻りて廣小路を左に折れつゝ、養賣屋に等しき小料理屋の奥  
 の一室、吊ランプの下、互に坐して差對ひし時は、上田も涙、お島も涙

かねて御名前は承ッて居ります、いつぞや山谷の木賃宿でも、夫婦が面目もない境涯を  
 入れましたのみか、其節は一方ならぬ御芳志、それに今また斯やうな淺ましい姿を』

その事は言ふに及ばん、しかし黒田奴、いよく怪しからん奴だ、諺にいふ身から出  
 鏑、自己みづから一身の落魄で濟むべきところを、前後の思慮もなく人の娘、いや妻を持  
 つも宜いが、持った以上は相應にすべき筈を、氣の毒千萬、そんな姿にまで落しをって、全  
 體どこに何をして居るで彼奴は』さう貴方のやうに仰しやいますと、あの人ばかりが悪く  
 ッて、妾が大變に何だか、迷惑でも仕て居るやうで御坐いますが、こゝは何卒、そんな事を  
 言はずに、えゝ腐れ縁だ仕ようがない、互に得心づくの悪縁で苦勞する奴等だと、かう思召  
 して、ねエ貴方』そゝそれが、其處が、さう聞くほど僕ア一種の感に打たれて、殆ど彼奴を  
 悪魔の如く思ふのだ、しかし、よく、あんな奴を見捨てずに苦勞して下さるよ、僕ア實に感  
 謝する、萬事は儲置いて感謝します、黒田は僕の兄弟でもないが』いひつゝ、大の男が兩眼の  
 溜め涙ほろ／＼と落せば、流星のお島も思はず齒を嚙んで差俯きながら、『あの人に、あの人

に定めし、いろん御不足も御立腹も御坐いませうが、どうぞ、この妾が、かやうな姿に落  
 ち果てましたに免じて、ねエ貴方』僕ア、いろ／＼言はうと思つたがね、もう何にも言はん、  
 畜生、天下たゞ一人の妻を泣かし天下たゞ一人の友を泣かす奴、僕の心中、殆ど無量の感概  
 に堪へんです』良人に連れまます女房の役目、まして妾のやうな女は譬ひ何うなツても宜う  
 御坐いますが、貴方のやうな、お友達を、お泣かせ申すなんて、誠に濟まない人で』いや細  
 君、さう言はずとも宜い、たゞ一度、黒田に逢はして下さい』それが先刻も、手を合はして、  
 おたのみ申しました事、なるほどお逢ひ下さいまして、御諫言の一言もいたゞけば、眞實あ  
 の人の爲にもなりませんうが、どうか茲を、もう二三年、せめて人らしい身分の端になります  
 まで、この妾が是非願ひ申しますから』ちやア餘所ながら、彼奴の面だけでも見せて下さ  
 い』ホ、、、顔ばかり御覽なすつたつて貴方』いや僕の心は、それだけでも濟むべき理由

があるんだから、千言萬語なほ飽き足らぬ彼奴に、もはや一言も交へない、断じて言はないから是非、面だけ、全體、僕の胸を打明けりやア、黒田は勿論、和女さんにも言ひたい事があるんだ、しかし、これは別問題さ』妾に、あの人の事は只今も申し上げました通り、どうぞ茲二三年、しかし妾に仰しやる事が御坐いますなら貴方、決して御遠慮なく、今こゝで『黒田に一言もいはぬ上は、それも無益だらう、いはない方が却って身の爲です』『おや、妙なことを、どうせ、こゝまで落ちましたもの、この上の爲にならない事は御坐いますまいから、おかまひなく、どうか』『ちやア一言だけ洩らすかね、實ア和女さんの伯父の家の、その二階を僕が借りて居るのさ』『え、ッ』

人事の奇なる、浮世の怪なる、粗密集散いよく、妙、人なき冬の夕暮に、ところは兩國の橋

の上といふさへ何とやら小説めいたるに、おもはず我ステツキに躓いて倒れし女を、おもひきや黒田が妻の落ち果てし身ならむとは、さては攔みし片袖あのまゝ振り切つて遁け出さば、しばし其影を見送つて我手に残りし形見の一品、これを持ち歸つて宿の主人に示しての物語より、やがて我その片袖を證據に夫婦が世を忍ぶ隠れ家を尋ねあてつゝ、何として何とやらせば殆どこれ一編の駄小説、只その片袖が切れもせず、おのれ見付け次第と張り詰め、平生の憤怒も現在その妻が涙の可憐に打消されて、一先こゝに黒田を見遇せしといふだけが小説の外、思へば人間萬事あり得べからざる小説の類が事實に多くして、人間萬事あるべき筈なる普通の事實が却つて浮世に妙し、あゝ天地は一大劇場、人事は宛然たる一小説、さては今朝の我頭腦より割り出せし天晴の統計論も、いはゞ生物を捕へて死物を數ふるが如く二一天作に打ち込んたる書生論、どうやら危しくと上田先生こゝに眉を擡めて無常の一端を

悟りぬ、

其八

黒田健次といふ男、いさゝか心に身の末を思つて胸に浮世の常を辨へなば、天晴れ當世に家をなし名を得べき筈ながら、唯どこやらに人並外れて恍惚いたる滑稽が立身の妨げとなり、また時に狂氣めいたる闇雲の飛び乗り藝が出世の害となり、所詮とゞかぬ天下丸香の横著に折角ふみ止りし立脚の地を幾度か失ひ、さては阿しう變に男ぶつて妙に腸を洗ふが如き本性、それも眞面目の人間にあることか、生憎此奴の性に宿るがため却つて事に躓き易く物に敗れ易し、されど元來の悪人にもあらず無學文盲にもあらず、また利害得失に迷ふ鈍物にもあらず窮達消長に闇き愚物にもあらず、しかも機を見て變に應ずる才氣は人一倍の頭上に飛び越え、事に臨んで生命ものは世上の萬事を何の糸瓜と心得たる大膽不敵さは、たと

ひ四面楚歌の聲裡に身を埋むるとも鼻唄うたうて撓まぬ男、よしや金が敵の世に落ちて借金の中より目鼻を差出すとも竟には大手を振つて仰し上るほどの奴ながら、あはれ何とせむ、人間は元來これ肉身の五體、病といふ敵に犯されては流石の男も枕頭に這ひ寄る油蟲一疋を殺すの勇なし、

されどなほ僥倖、こゝに過分の女房お島といふものあればこそ、お島また女の中の變物、乗れば乗るべき玉の輿を十九の春より振り捨て、二十六の今日まで、この難物どのに苦勞さなく、草を敷き寐の夢うつゝ、幾度か泣きの涙に身を浮かせつゝ、思ひ切つて死目の際の壁一重まで落ち果てながら、偕とこが宜いやら他人には知れぬ貞女立、しかも今日このごろは皮も破れし古三味線といふ淨瑠璃文句そのまゝ、人の軒に立って一文二文の手のうち貰ふまでに成り果てながら、

本所の場末、むかしは藁蓆一枚を錦繡の夜具に代へたる辻君の巢なりとぞ聞き及ぶ、その吉岡町の裏長屋に、今はこれ宿昔青雲の梯より眞逆様に落ち果てたる黒田健次、疾病の床に臥して破れ蒲團の柏餅に餡が食み出る五體を締めながら、一時はマニラの葉巻を吹いたる身がカンテラの油煙に咽んでの男泣き、あゝ貧は諸道の妨害といへども病は一身の劔なりけりと、瘦せ枯れたる手首に枕頭の鼻紙を探つて、飛び出でたる頬骨に窪みたる眼の光り物凄く、破れ窓より吹き入る風を厭うて思はず總身を震はしぬ、折しも氷れる路次口に、乾き切つたる草履の登音は正しくお島、わけて今夜は何として斯く遅かりしと思ふうち、はや門の戸口に立寄つて靜に引き開けながら、『只今、歸りましたよ』いふさへ常に變りし震ひ聲、さもあるべし、世間は正月の元旦、我等は現世の地獄、泣

きの涙に唄ふ小唄を屠蘇の機嫌の面白さに聞かれて、しかも肌薄き寒天の編笠一重に恥辱を忍びつゝ、一文二文の手のうち乞うて病める良人の我を養はむがため、かはいや、今ごろまでも素足のまゝの破れ草履、これが女房なればこそ、あゝ勿體なし、勿體なしと、うまれ故郷の氏神に青痰ひツかけて國を飛び出せしほどの男なれど、おもはず片手をあけて障子の影を拜みぬ、

お島やうく裾の塵うち拂うて水雑巾の濡れたるまゝに足を拭ひつゝ、障子ひきあけて臥せる良人の顔色まづ窺ひ見ながら、今の露命を繋ぐ古三味線と編笠を片隅に差置き、缺けたる火鉢の土瓶を卸しつ灰かきわけて埋火の炭團を掘り起し、そのまゝ顔に兩手をあて、差俯きし體、嗚や寒かりし夜の霜にうたれて齒の根も合はぬためかと思ひの外、しゅつと火に落せるは一滴の涙、おもはず顔ふりあけて、『わけて今日は酷寒かつたことよ』

健次は見るに忍びずとや、臥せるまゝの枕くるりと振り代へて壁に對ひながら、「だらうよ、ねエ、かうして家内に寝て居てさへ身に徹へて堪らなかつたもの、第一、今日は正月の元日、それに和女が其さまで」「なアに貴方、そんな事は何ともないさ、どうせ斯うなりやア昔からの文句通り、藝が身を助けるほどの不幸さ、かまふもんですか、人は七顛び八起きとやらで、冬が仕舞へば春が來ますさ、今だッて貴方、よその軒に立ッて、お錢は貰ッても、お飯の喰ひ餘しを貰ふぢやアなし、それよりは貴方が一時も早う、よくなッてね、また思ふ存分に跳ねて御覽なさいな、氣を落さずに」「おいさ、しかしねエお島、去年名古屋の失敗以來わづか一年半のうちに、かうまで落ちたア思はなかつたよ」「だッて貴方、肝要の身體が悪いんですもの、誰だッて病氣に勝てるもんですか、妾の苦勞するぐらゐは何でもないこと」「さう和女にいはれるほど、猶更よ、時に腹が空いたらう、湯だけは氣をつけて、その土瓶

に湯かしてあるから、はやく茶漬でも搔ッ込むが宜いよ、この上、和女に煩はれちやアそれこそ往々寂滅、夫婦抱き寐の凍え死だ、せめて、も一度よくなッて、畜生、思ひ切ッた盛り返しを仕てみたいよ」「心細いことを、お言ひでないよ、それくらゐの病氣に死んで堪りますものか、延喜の悪い、夫婦抱き寐の凍え死なして、今に夫婦抱き寐の花見でも仕ませうよ」「ハ、、、、斯うなると乃公より和女の方が剛者だ、おかけさまで持ッた男一疋、どうか再舉の全盛、やッてみたいもんだ」「やれますッて、やれなくッても妾が一念で、きツと、やらして見ますわ、なアに貴方、萬事は浮世でさアね、ホ、、、、まだ屋根の下で雨にもうたれず寐られる境涯から、野仆死の死骸を區役所の手で假埋葬とやら仕られる迄にやア大分の道程もあッて手数が掛りますよ、妾は女でも、それくらゐの料簡で居ますから、ちツとも苦しいア思はないに、近來、病氣の故でもありませんが、貴方にも似合はない弱音が出ま

すことね、しツかりなさいよ、貴方も世間普通の男たア違ッて、ほろく書生の舌一枚から三千何百噸の汽船を動かした貴方ですに、なさけない、さア氣を取直して、はきくと例の駄洒落でも仰しやい、三味線でも弾きませうか、お心易いに免じて、お錢は戴きませんよ、ホ、ハ、ハ、ハ、その三味線を弾き出されて堪るものか、そりやア乃公がために和女の悲鳴も同然だア、勿體ない、時にお島、今日は乃公も何の氣なしに出したがね、あとで老へると、どうも忍びないよ、明日と明後日の二日だけは止しにするが宜い、せめて正月の三日だけでも、うぬが女房を其風俗で出したくない、三度の粥は二度す、ツても構はないから、嗚呼、せきぞろ編笠だの鳥追の小唄など、よく昔の繪にあッて何となく太平の象を現してるやうだが、さて現在まのあたり自分の境涯となッちやア慘憺の極、大に不<sub>レ</sub>太平の現象だ』

『だッて貴方、家に居ても人並の正月が来るぢやアなし、それにまた、この家業は松のう

ちが稼ぎ時ですよ、御覽なさい、けふの一日は常の七日分より多いですよ、そら一回近くあります』いひつゝ、帯の間より色褪めし毛糸の巾著を取り出して、ざらりと枕頭に音さすれば、健次おもはず臥せるまゝの頭を震はせながら『一圓、わづか一圓内外が、七日分の稼ぎより多いたア、お島、勘忍しろ、よ、今に乃公が、よくなッて』『それく、さうですとも、その、ですよ、一時も早う、よくなッてねエ、今の苦勞を寐物語りですよ、うたの文句にある通り、すぎし昔を夢にして、ねエ』『む、』

せめて此三日だけはと引き止めしかど、今年は今年、來年こそ二度ぶりの正月めでたう重ねて迎へむと、またもや編笠に面を包み古三味線を抱へて立出でむとする妻が後影、健次おもはず臥したるまゝの枕を歎て、見送りながら、『ぢやア往ッてきな、しかし早く歸るが宜い



ぜ、前夜のやうに遅くなッちやア身の痛だ、冷えるからね』『あい、なるべく早く歸りますよ、  
 そして今夜ア何か、あつたかいものを買ッて來ませうよ、もし貴方に出來ない用でもありや  
 ア、隣屋の婆さんをお呼びなさい、萬事たのんで置きますから、しかし、あんまり横柄にい  
 ふと可けませんよ、どんな奴にも斯うなりやア仕方がない、お世辭の一つも振りまいてね』  
 『おいよ』『いつてきますよ』『氣をつけなよ、一月ア酔ッばらひが多いからね』『大丈夫、そ  
 ンな事は、たしかです、ぢやアいつてきますよ』お島が立出でし後には、さすがの健次も夜  
 具ひツかついで、をりくほッと溜息を漏らしぬ、  
 此日の晝ごろ、路次口より一人の車夫が入り來りて、黒田さんと仰しやるなア當家ですかと  
 いふに、健次は臥したるまゝの首を擡けて、『さうさ、この長屋中で黒田は此處一軒だが、何  
 の川で』『へい、これを持つて來たんで、こりやア當家へ届ける品ださうで、委細は中の手紙

にといふこッてす、風呂敷のまんま置いてゆきますから』『おいく誰からだ、おい全體、ど  
 ッからだ』しきりに呼び戻せども、かねて言ひ含められてや車夫は其まゝ見返りもせず走せ  
 去りぬ、  
 追はむにも病める身の叶はず、叫ばむにも此ごろの聲涸れて及ばねば、置き去りし白金巾の  
 風呂敷づゝみ、臥したるまゝの手を差し伸べて引き寄せつゝ、その結び目に反古の觀世掇も  
 て固く封せるを、いよく怪しみながら解いて見れば、八寸ばかりなる杉の折箱、鶏卵三四  
 十を埋めたる粉殻の上に一封の書状めいたるもの、しかも宛名の文字はなけれど、この裏長  
 屋に入り來りて黒田、たしかに黒田々と二度も念を押せし車夫の言葉、よもや門違ひ人違  
 ひにあるまじと、その一封を開けば十圓紙幣七枚、健次あつと驚きぬ、  
 身は疾病に伏して賣藥の手療治も届きかねたる境涯、まして一人の妻に古三味線か、へて門

に立たすほどの今この我に、名もいはず仔細もいはで届け放しの七十圓とは、そもく何者ぞ、思ふにこの鶏卵は車夫に悪意なからしめむとの一品、この金子こそ送りしもの、本意なるべし、さるにても何者ぞ、奇怪、奇怪、ふしぎくと猶その七十圓を手に取り上げて數ふれば、別に紙幣と同じ紙幅を挿んで何をか書ける文字あり、健次じつと腫を凝らせば、

天は汝を惡む、されど汝の病を憐れむ、

や、筆は正しく一目に其人と知るべき上田力、さても上田なりけり、力なりけり、されど何として今この隠れ家を知りけむ、家を知るのみか何として我病を知りけむ、また彼奴に何として七十圓の金、そもく川上倉橋の類ならば別れて茲に數年の今日、世に出で、七十圓の金子さらに怪しまねど、彼の狷介、彼の潔癖、彼の朴訥、彼の頑たる一徹、彼が如き獨尊孤立の性として今なほ一個の仙骨なるべく、よしや世に出づればとて清貧洗ふが如き管の上田

が、一時に七十圓、しかも揃ひし手より出でたる十圓紙幣七枚を得らるべき境涯とは猶更ら以ての奇怪、されど上田なればこそ、嗚呼かの力なればこそ、かつて山谷の木賃宿に我落魄を見て前後の差別もなく汐入村の跡仕末に託されたりといふ十餘圓を抛って去り、今またこゝに七十圓、あはれこの七十圓は正に彼が天性として熱湯を飲むよりも苦しく幾何の潔白を損じ幾何の疑懼を抱き幾何の慘憺たる苦心の中より湧き出でたる賜物なるべしと、黒田健次おもはず病床に起き直って端坐しながら、あゝ君は我を惡む、されど我の病を憐れむこと斯の如きかと、窪める兩眼の涙はらくと落しぬ、

いにしへの君子なるもの我これを知らず、たゞ我友に斯の君子あり、かつては愚と稱し野暮と嘲り不通と罵り仙人殿と笑ひ、果は太古の遺物よろしく考古學者の一槩に供すべしと冷罵嘲笑のあまり殆ど度外に置きしを思へば、正に大罪を犯せるが如き我、こゝに慚死すべき管

の我を、彼なほ捨てずして我を思ふことの切なる、あはれ何をもて酬いむ、さても我この病に伏して此まゝの窮巷破屋に死するとも、妻としてのお島あり、友としての上田あり、さらに人間の不幸なるものにあらずと、十年一日さらに屈せざりし黒田ほどの横著物こゝに感謝の腸を絞つて泣きぬ。

はや冬の日の暮れ易く、寒天に啼き渡る鴉の聲も身に染みて、心せくまゝに刻み歩に歸り來りしお島、やうく家内に入りて破れ障子ひき開けながら、「只今、けふは平生より早いでせう、ほんの僅少ですが、あの牛肉を買つて來ましたから、すぐ煮てあげませうか」いひつゝ、ふつと枕頭の折箱に目をつけて、「おや、それはどうなすつたの、どこから」「これが、こりやア鶏卵の折で今日、さる人から貰つたのさ」「さる人って、どこから」「それが妙さ、晝ころね、一人の車夫が、たのまれ物だから置いて置き去りにして往つたのよ、いゝや決して、お門違ひ

でもない、たしかに黒田々々と二三度も念を押してよ、しかしお島、まんざら心あたりのないでもない、まだこの折箱の外に、そら金が七十圓この通り」「おやッ」「今の此さまたもの、一圓の金だつて誰が呉れるもんか、まして七十圓を名前も言はず、鶏卵の折に入れて届けつばなしの贈り主は」「ちよいと、お待ちなさいよ、萬一、ひよつと、いや、それにしては、はてね」「おや和女の方にも何だか、心あたりのあるやうだな」「ないでも、ありませんがね、少々お金の高が合ひませんから」「ふしぎな事をいふ、金の高が合はないア」「いゝえ貴方、勘定の高ではないの、たゞね、妾の思つてる人にしては、よもや、これだけの金はと、思ふのですよ」「むゝ、しかし、そりやア誰だ、何といふ人だ」「妾より貴方の心あたりは」「和女から言つて見な」「なに貴方から」「いや和女から聞かう」「ちやア言ひますがね、もしや、あの上田といふ人」「えッ、どゞ何うして、それを」「えゝもう何も彼も打明けて仕まひますがね、實

は、その上田といふ方に、前夜、逢ひましたの』『逢ったア、いや眞實に逢うたのか』『なに貴方、虚偽をいひますものか、しかも兩國橋の上で、この、この袖を掴まれた時、妾やア手を合はして、を、拜みましたよ、泣くにも泣かれず、遁けるにも遁けられず、まるで芝居さ』『や、それで分った、その時この住居から病氣の事を』『なに貴方、どうして家なぞを知らずもんですか、妾は兎も角も、連れ添ふ男の恥辱になることつてすもの、是非とも黒田に逢ふつて、頻りに問ひ詰められましたが、そこは一所懸命、どうやう斯うやら言ひ抜けて、しかし、妾の後影から見えがくれに前夜、ついて来たかも知れませんよ、全くは』『む、』『そればかりぢやアない、貴方びつくらする事が、まだありますよ』『なんだ』『なんだつて、こりやア流石の妾も反り返りましたよ、あの黒田さんがね、二階を借りてる家の亭主が貴方、例の妾が伯父さんなの』『え、』『しかし上田さんは男ですよ、妾が段々と理由を談しましたら、あの怖い

目に涙を一ぱい溜めながら、今夜の事は上田が胸一個に藏めて、決して誰にも言はないから、何分よく黒田を介抱してやつてくれるつて貴方、實に、あの人は外貌によらない心の優しいばかりか、男ですよ』『あいつア男だ、男だ、しかも骨から響るたア彼奴の事さ、この七十圓も、どれほど骨を折つて生み出したやら、そして上田の下宿、いやあの伯父の家を聞いたか』『それがさ、どうしても言つて下さらないの、乃公が黒田に逢はないうちは乃公のところを言ふにも及ばないつて、その實、妾等夫婦に心配させまいと思つて下さアね、あれこそ全くの男、しみく感心しましたよ』『いや、ともかくも珍しい男だ、しかし世の中は不思議だね、あの伯父の家に上田が居つて、その上田に和女が掴まったとは、それが却つて乃公の幸福で、明日から醫藥にかゝれるたア、實に不思議だ人間萬事』『ですから、油断がなりませんよ、悪い事は出来ないもの、何だか浮世が怖くなつて來ましたわ、あんまり廻り合せが手殿しいか

ら」「ハ、ハ、ハ、さういやアまつ、そんなものだが、しかし不思議だ、妙だ」

其九

川上夫婦が人しれぬ一夜の寮物語りに、「ねエ芳、上田のこつたから別段どう斯うツて怪しい事のある筈もないがね、そら去年の冬、和女から言ひ出して、あんな裏屋の二階で自炊さすよりやア此方へ引き取ツて、少しでも氣樂にさしてやらうと思ツた時、彼奴が例の頑として應じなかつたは宜いが、その月から少々變だよ」「變だとは、何か變な事でも御坐いますの」「外でもないがね、和女も知ツてる通り、月々十五圓づゝ仕送ツてやるが、いつも五圓乃至三四圓は餘分だと言ツて、いくら押し戻しても抛り込んで歸る奴がさ、先月に限ツて其まよ」「そりやア貴方いくら上田さんだツて、一年中の暮ですもの」「それは承知さ、だから別に乃公の小遣から十圓といふものを餘計に遣ツて置いたに、まだ半月たつか経たない前夜、め

づらしいこつたね、金を借せといふのよ、それも上田の事だから、かういふ新版の書物とか下駄とか何とか、いつも子の親に於けるが如く正直に必要な物品を證明する男が、前夜に限ツて突然、しかも七十圓といふ金を借せといふんだ、無論、この上田方に七十圓の金子は定めて怪訝に堪へんだらうが、その疑ひ怪しまるゝを甘んじて借用したい、もし君にして上田を棄つれば已む、幸ひ未だ捨てずんば是非とも借りたいツて、何だか常にない語氣で、また頗る決心して來たらしかつたよ」「おや、さうですか、なるほど變ですな、しかし貴方、どうなさいました」「どうするもんか、彼のこつたから、其ま、出して遣ツたよ、出しては遣ツたがね、あとで考へると、どうも此ま、捨て置かれぬ、何故ならば、上田に與ふる七十金さうに惜しまぬが、上田にして俄に七十金の必要に迫ツた理由が容易ならんこつた、彼が身に取ツて」「さうですなエ」「さうですなエぢやアない、和女、なんか上田に就いて、別に變ツた

様子でもあると思はないか』いゝえ別段、やはり平生の通り、あんな方だと思つて居ますよ』  
 『む、いよく、奇怪だ、まさか上田がねエ、色の戀のと』『ホ、、、、上田さんが貴方、  
 馬鹿らしい、そんな事が』だから猶更ら不思議さ、しかし乃公も一旦、男らしう何にも問はず、唯、よしと一言の下に出した金の使ひ道を、今更ら呵しう改つて詮議立も出来ないから、こりやアいつそ和女からでも』いゝえ、妾では却つて、それよりか、あの清は如何でせう、彼女ならば萬事あの通りの無遠慮で其上に愛嬌もあり、また二階から落ちて以來、俄に上田さんと感情が善くなつて居ますから』『む、さうだ、よく氣がついた、なるほど、清が宜い、あれに萬事そつと言ひ含めて、何となく餘所ながら探らしてみんなだ、防ぎ手が上田で攻め手が清と來ちやア面白い、面白いのみならず、逆も上田は叶ふまい、きつと攻め落されるね、一方が殆ど一本調子の朴訥で一方が元來なかくの剛者、浮世馴れた圓轉滑脱の下

女辯をふるつて縦横無盡に攻め立てるからね、先生うろく、狼狽へて孤城落日の哀れを呈するに相違ないぜ、とにかく清が宜い、ハ、、、』

さらぬも忠臣無二のお清、こゝに君命を帯びて上田が籠城を攻め落さむと、著古しなれど恩賜の琉球紬を洗ひ張つて今日の晴衣とし、下著は田舎の伯母が死記念に貰うたる米澤の大名綺、二年越しの給金より幾分づゝを溜め込んで求めたる唐繻子の丸帯しつかと引き占め、あらたに結びあけたる新蝶々の根掛には小粒なれど珊瑚珠を聯ねて下女不相應の膽魂を現し、出入の商人が随一の金高その米屋より贈られたる籐表の駒下駄からころと踏み鳴らしつゝ、敵に臨んで戦ひの口火に抛け込むべき菓子折を右手の小脇に引ッ抱へ、左手にブランの大瓶ひツさけて、さア雨でも風でも御坐れ下戸上戸もろともに打斃さむと、まんまるの肩を怒らし

家鴨に似たる尻を振り動かし、満面はツと白粉を施して向うたる勢ひ、いかなる男も忽ち踵を返して遁け出すべしと思はれぬ、

兩國橋を渡つて回向院の前より左に折れ、小泉町の裏長屋、路次口の一の木戸を窺うて武者振ひしながら、そろく本城に攻め寄せし折しも、敵は斯くとも知らざりけむ、我家の戸口を立出でむとして、『やアお清君、何か用かな』『おや上田さん、どこへ入らッしやるの』『いや別に何處ツて、的もなく、たゞ茫然と寒風に吹かれながら、腹でも減らさうと思つてさ』『お風邪を召しませ、およしなさい、御散歩は夏の事ですよ』『馬鹿ア言へ、風をひくんなさア片々たる俗界の俗物が身體よ、乃公なンかア正にこれ鐵腸鐵身、故に生涯一度、死病にあらずんば病まないんだ、しかし用がありやア謹んで承るよ』『甚だ失禮ですが、貴方の御部屋まで』『こゝで此ま、濟まない用かな』『少々お長くなりますから』『あまり長くなられち

や困るよ、ハ、ハ、ハ、ハ、また慌て、二階から落ちまいぜ』『ホ、ハ、ハ、ハ、』

さらば来いと其ま、お清を伴うての逆戻り、どしくと音する後より又みしくと二階の梯子段を上りつ、『おや、まツくらですね上田さん』『さて、今に火を點けるから、ちツと靜に泰然と其ま、其處に落ち付いてる、全體お清君、和女の身體はね、だぶくと變に肥り過ぎて妙に様子ふるから中心を失ふんだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、闇中に物を探るが如しか、いや如しぢやアない全くだ、豆ランプの置き處は机の上の、おツと此處だが儲マツチは、はてな』『下から火を借りて来ませうか』『いや、よくそれに及ばん、ない物は無いが、あるべき筈の物は必定あるんだ、借りちやア不可ンよ』『だって貴方、あんまり手間が取れますもの、お金を借りるではなし、マツチぐらる借りたツて』『何だと、金を』『い、えさ、お金とマツチは一所になりませんかね、まア物の道理が』『いや借りない、決して借りない、きツと探し出すんだ、もし遅

くなつて悪けやアそのまゝ直に歸るが宜い』「ホ、、、なに貴方、悪いとも何とも申しは  
致しませんに』いひつゝお清が面つきだしてペロリと舌を出せど眞黒闇、ぢやア黙ッてる、  
マツチの見付かるまで、畜生をかきな事をいふ女だと振り返つて睨めども眞黒闇、やう／＼  
探し出して豆ランプに火をつけながら、例の達磨然たる上田先生おもむろに振り返れば、お  
清も今日は心のうちに神算鬼謀をめぐらして膝を進めつゝ、携へたる菓子折とブランの大瓶、  
『あのウ上田さん、貴方は宮本武藏流だからつて、此お菓子は若奥様から、またこの御酒は  
若旦那様からの御進物です』「ハ、、、夫婦で雨風の進物たア妙だ、しかし人は其氣のあ  
るところ自然と物に現るゝもんだね、まづ細君がよ、その容貌の彩つて美なること菓子の如  
く、其ほつとして未だ深く浮世の風に當らざる箱入娘の餘波が甘味で、人に接して愛嬌のこ  
ほるゝところが風味で、交際場裏の華ともいふべきだがね、もし食ひ過ぎると胃を害して人

を害ひ、もし久しきに渡れば腐敗するの恐れあるは、正に懷中生育の婦人が氣隨の性として  
無遠慮の上田ななどを竟に疎外するに至るが如く、をり／＼の寐物語りに良人を唆してね、  
ハ、、、怒ツちやア不可ン、全くの事だ、女といふものゝ神聖は處女のうちで、人の妻と  
なつては既に業に小人と一般、逆も養ひ難きものさ、また川上のブランに於ける如き、その  
ピンとして殿しい中に一種の情を含んで甘味のあるところが彼の本性で、しかも量を知つて  
飲めば無上の興奮劑となり、情を知つて交れば無類の益友となる、が、この限りある瓶に入  
つて巧妙美麗なるレッテルを貼り付けたところが正に當世紳士たる富田家の婿になつた所以  
で、惜しむらくは我輩、これを製造したまゝの大なる樽より汲み上げて呑み得ざる遺憾さ、  
ハ、、、時に用は何だね』「おやく／＼ちんぷい／＼で何のこつたか分りませんが、大變  
に長い前口上ですね、用つて、別段これといふ用でも御坐いませんの、たゞね、貴方が、お清



しからうツて、この二品を』『ふむン乃公の御機嫌を伺ひに來たのだな、使者がら猶更ら以て  
 痛み入るよ、いやもう見る通り御機嫌の體で、わざ／＼寒風に吹き抜かれて腹減しに罷り出  
 ようかといふ勢ひだよ』『虚言を仰しやい、いくら貴方だツて、一月早々、わけて昨日今日こ  
 の酷い寒さを好んで、わざ／＼吹かれに行く好奇がありますものか、虚言々々、あら虚言だ  
 わ』『こら待て、いやしくも上田力たるもの、生來いまだ曾て一言の虚偽を言ツた覺えはない  
 ぞ』『ホ、、、よくまア貴方、しら／＼しい、そんな眞面目な顔をして、なるほど上田さ  
 ンのこツてすから、たいていの人は眞に受けませうが、どツこい、そこは憚りながら妾です  
 よ、白むくでツか、ぢやアない、失禮ながら黒むくでツか』『や、此女また喧嘩しに來をツた  
 な』『い、え決して、なか／＼貴方、そんな大膽な、失禮な事が』『ぢやア何故、からかふんだ』  
 『からかひは致しません、虚言だから虚言だと』『た、唯が虚言を』『貴方が』『畜生』『いけ

ません、いくら何と誤魔化しても貴方だめですよ、はア、だめです』『何が、だめだ』『何がツて  
 知ツて居ますよ、ちやアンと御存じなの、この三平二満が』『ハ、、、きさま、みづから  
 三平二満たるを知ツてるのか、いや感心、おのれを知るものと謂ひつべしだ、ハ、、、』  
 『上田さん、卑怯です、貴方にも似合はない岐路へ這入ツちやアいけません、さア白状なさ  
 い、いッたい全體どこへ往らツしやるの、この寒いに』『卑怯、白状せい、こら卑怯たア何だ、  
 白状とは何を』『とほけてさ、憎らしい、貴方ア外見によらない術のある方だよ、どこの間拔  
 が此寒空に、ホ、、、世間は寒くツても、どツか人の知らない、あツたかな穴があるんで  
 せう』『穴、いよく、以て穩かならん言を發する女だ、うまれて青天白日の下に大道濶歩のこ  
 の上田を、穴へ這入るたアどうだ、穴とは』『穴とはね、御自分が獨りでそツと覗うてコソコ  
 ソと這入り込む穴のこツてすよ、そら、その穴には、美人が化粧をして待ツて居ませう、あら

上田さん入らっしゃい、ちよいと御様子ごようすの宜いことよ、平生お見受け申しても、とか何とか言ッて、ねエ貴方、おや、おやノ、上田さん、おツかないこと、そんなに目をむいてさ、お憤りおきりなさらないでも宜いぢやありませんか、おや、おやノ、妾をおぶらなさいませの、『馬鹿、きさまのやうな女を、ぶち殺したッて、なんになるものか、馬鹿め、早く歸れ』『歸りません、その穴を仰しやるまでは』『や、この家鴨め』『家鴨』『家鴨ぢやアないか、いやに横肥り仕やアガッて、胸を突き出して、不美術な大尻びよこく振ッて、ぎやアくと喧しい、家鴨女』『同じコッて、あひ鴨と言ッて下さいよ上田さん』『いッて下さいよウか、また畜生、よウと出やアガッた』『ガッても、がらないでも、それは別問題』『別問題、こりやア阿しい、滑稽の極だ、別問題たア恐れ入ッた、殆ど天下の奇だ、全體いつ誰に教ッたのだ、別問題なッて』『さう貴方、輕蔑けいべつなさるもんぢやア御坐いませんよ』『輕蔑、や輕蔑か』『輕蔑ですよ、し

かし上田さん、妾の言葉尻ことばじりばかり捕とらへて貴方、御自分の返答は何となさるんです』『何の返答だ』『穴のこッてす、さアどの穴です、この蟹野郎、なぞと失禮な事は決して申しませんから』『あ、小人おのれが心を以て叨りに君士人を忖度するか、ハ、ハ、ハ、ハ、お清君の身を以て上田力を評す、豈あにそれ當を得むやだ』『そりやア何のこッてす』『雪隠の糞くそたまく、窻より出で、空飛ぶ鷹たかを笑ふと一般、そもく和女などの心でね、この上田が進退舉止を窺うかがひ知ることでが出来ようかといふんだ』『あら、酷いことね、妾は糞くそで貴方は鷹たかですか』『まア物の比喩たとへが、そんなもんだらうよ』『おや、おやノ、しかし上田さん、あの七十圓といふお金をどこへお遣りなすッたの』『えッ七十圓』『知ッてますよ、貴方が若旦那わかだんなに對うて、七十圓お借りなすッたことを、ちらと襖の隙間すきまからね』『こりやア怪しからん事をいふ女だ、乃公が必要あつて借りた必要の金を、きさま下女の分際ぶんさいで無禮至極、入らざる詮議だ』『いえ貴方、詮議な

て、そんな事むづかしい理由ぢやア御坐いませんがね、その穴を白状なさらないから、おたづね申しますの、下女風情は心得て居りますよ』『心得て居りやア黙ッてる、きさまが』『しかしね上田さん、こりやア全く貴方の御爲ですよ、もし萬々一、をかした穴へでも、お捨てなされるやうな事があつては、折角これまでの御名前に、なるほど學問も智慧も萬事御立派な方に、ふしつけない、妾なぞが申さずともこのツてすが、浮世といふものはまた格別、人間に魔のさすといふ事も御坐いますし』『むゝさうか、ぢやアまづ深切に言ッてくれるんだな』『誰が貴方、こんな悪まれ口を』『いや、よく分つた、分つたがね、あの金は少々仔細あつて』『さアその少々が大變です、一度が二度、三度四度と重ッては、阿漕が浦に曳く網ですよ』『ハ、ハ、をりく柄にもない秀句を吐きをるわい、しかしお清君、心配するに及ばん、上田力は男だ、たとひ飢ゑて死すとも斷じて墮落しない覺悟だから、あの七十圓もさ、決して恥づべ

く厭ふべく怪しむべき不潔の場所へ使ッたんでないが、今しばらく沈黙を守るの必要ありだね、心に疚しからずんば百千の攻撃譏諷また何すれぞだ』『ぢやア貴方、どうしても仰しやらないの』『いはない、今こゝで君に言ふべきの必要を認めない』『ホ、ホ、ホ、それで妾から言ひませうか、實はね、其お金の落ちた先まで、ちやアンと知ッて居ますのよ、なるほどお言葉の通り、をかした穴ではないこツて、義理人情にお迫りなすツた事まで』『え、ど、何うして』『どうしてツて、そこは妾ですよ』『ふむ、妙だな、ちやア試みにあて、みる』『い、え言ひません、今こゝで言ふべきの必要を認めない』『認めない、こん畜生、乃公を嘲弄するな』『燈籠駿河の名物、そんな事は儲おいて、全く知ッて居ますよ、しかし貴方が白状なさらないから、妾が知ッてるだけ若旦那に申し上げて置きますわ、上田さんが七十圓の使ひ道は斯うく』だと』『こら待て、きさま自分が思ッてる通りか通りでないか、まだ本人に聞きもしな

いで』『ですから貴方におたづね申しましたの、もし妾が言ふことと違つちやア却つて御迷惑だらうと思つて』『やア此女め、いよく困らせるな、よし、ぢやア乃公から直接、川上に打明けて仕舞はう、家鴨の啼聲で事實を間違はれちやア残念だから』『さうくそれが第一の徑路です、それでは妾も今こゝで、ホ、ホ、ホ、お聞き申す必要を認めないといふもの、また貴方も妾に言ふべき必要を認めず、認めず同士で宜いぢやアありませんか』『えッ早く歸れ馬鹿、こてくと白粉などを塗りやアがつて、見られた面かい、その面ア、まるで石灰小屋の化物だ』『御免下さいまし、これは生來で』『生來、うまれつきに、そんな面があるもんか、そり、アうまれ損ひだ』『うまれ損ひぢやア御坐いません、親どもが産み損ひで』『どうでも宜いから早く歸れよ、歸つてくれ、頼む、どういふもんか乃公は、きさまに物をいはれると忽ち神經に異状を呈して妙な心持になるよ、きさまは餘程ふしぎな女だ、堂々たる鬚髯男子をして

猶かつ恐れしむ、死とこれ一種の微菌に等しいもんだな、石炭酸でもぶツかけてやらうか』『いえもう貴方、どうか御無用に』『ぢやア早く去れ』『去りますよ』『去らんか』『去りかけて居ります』

其十

お清が馳せ歸つて戦狀かくと注進せしかば、川上夫婦おもはず手を拍ちながら、天晴れ手柄と當座の褒美に半襟一筋、おしいたゞいて自己が部屋に退きし體、宛ら凱陣の勇士に似たりける、

されば上田が直接この我に對うて、あの七十圓の委細を白狀せむこと、今日か明日かと待ちうけれど、力先生さらに其後は來らず、やうく三日目の朝、宿の老爺に一書を持って來らしめぬ、半紙一枚に禿筆のなぐりがき一ぱい、その文にいふ、

心に疚しければ一金なほよく六尺の有髯男子を愧死せしむるに足る、されど萬金また一婦の徳を害ふ能はざるものあり、乞ふ愚なりと雖も茲に七十金の故を以て上田力を疑ふ勿れ、

婢、清なるもの明りに我寓を襲うて言ふところ此七十金にあり、そもく君の命か細君の意か將また彼が一個の借越か、これを問うて後、我その七十金の委曲を語らむとす、乞ふ、力を以て其恵に依りながら倒まに其人を要するものとなす勿れ、かの七十金を賜ふの時、すでに既に其散する所以を告げざるの約あり、

重ねて一言を呈す、願はくば上田力を以て財の用を恣にするものとなす勿れ、また友を欺き自己を欺くものとなす勿れ、我もし虚偽の言をなさむとすれば、何ぞ電光朝露に等しき人間生活の常に於てせむ、正に死せむとするの一刹那、みづから欺くと共に天下

後世を欺くべきなり、言を換へていはゞ人の將に死せむとするや其言善しといふの時に於て我は大に人を欺かむと欲す、呵々、死際の虚言は虚言で御坐なく候以上、

川上兄足下

上田力

さすがの川上も一讀の下に、はッと思つて其まゝ上田が宿に走り行けば、力先生さらに泰然として迎へながら、「やア川上兄足下、曩に婢、清なるものが歸つて何と言つたね、彼女みだりに鼻頭の下女辯を振うて僕の愚を輕んずるの極、うまく言ひ詰め言ひ落した心算だらうが、儲さうはゆかないね、ハ、ハ、ハ、時に先刻の一書その末文が僕の本領だ、僕ア斯うして生きて居る間には決して虚言は吐かんぢやアないか、君、同じ人間同士が屁に似たる利害得失を案じて百年未滿の短日月間に自己を欺き人を欺くの苦策をめぐらさむよりやア、イツそ虚言

上田力

六

をいふなら今や將に死せむとするの一粒那、敵も味方も枕頭に呼び寄せて大に虚言を吐きた  
 いね、ハ、ハ、ハ、ハ、その虚言たるや人に害なく世に害なく、また自己に疚しからずして却つ  
 て碩徳智者が生きて饒舌る千萬言より重きを置かるゝの力あるからね、つまるところ決して  
 虚言にならないよ、いはゆる上田力が虚言の秘傳こゝにありだから、安心し給へ、かの七十  
 金のことも、ハツハ、ハ、ハ、ハ、

天は汝を惡む、されど汝の病を憐れむとの一言に七十圓を添へて贈りし後、さても彼奴が病  
 状いかならむ、餘所ながら見てやりたし、お島といふ女も人には知らず黒田に取つての貞女、  
 機よくば再び逢うて慰めやりたしと、一日の夕暮、ぶらりと宿を出で、例の布子一點寒晒し  
 の大兵を運びつゝ、遠くもあらぬ吉岡町たしかに此裏長屋と、宵闇の星明りに窺ふ折しも、

晝は流石に憚りてや味噌澁飯を破れ前垂に包んで路次口を立出でしはお島、何心なく過ぎ行  
 かむとせしを、上田みるより聲を潜めて呼び戻しぬ、『おい黒田の細君』

お島はツと思つて立止りしが、忽ち其人と知りけむ、俄の小走りに駆け戻つて腰を屈めなが  
 ら、『おや貴方、上田さんぢや御坐いませんか』『むゝさうだ、黒田の病氣どうだね』『いえも  
 う貴方、お目にかゝつて何から御禮を申しませうやら』『これさ、餘計な事は聞くに及ばん、  
 たゞ黒田の病氣どうだといふんだ、ちつたア宜いかね』『はい、有難う御坐います、何は儲置  
 き、過日は貴方』『い、やさ、そんな事を聞きに来たんぢやアない、黒田の病氣』『それが貴方、  
 おかけさまで、お醫者さまにもかゝりまするし、また本人も男泣きに泣きまして貴方の事を、  
 妾もあれからは、あのやうな卑しい外へ出る稼ぎを止めました、今では介抱かたぐ、枕頭で  
 マツチの箱を内職に』『むゝそれでよし、醫者も醫者だが第一に本人の養生と傍に居るものゝ

介抱が専一だ、全體、何と言った醫者の診察は』』はい、別に大した病氣でもないが、あんまり腦を使ひ過ぎた上に酒の故もあつて、少々心臓に故障が、しかし氣を落ち付けて滋養物さへ』』よし分つた、時に過日の金は、まだあるかね』』どう致しまして貴方、あれを普通のお金など、思つては居りません、全く貴方の血を絞つて戴いたも同然のもの、やうく、まだ三分一しか』』なアに黒田に遣つた金ぢやアなし、病人に對する金、決して惜しんでは不可んよ、どうせ足りまいから其うちまた何とか工夫して、ともかくも、あの病だけは乃公が外から治すから、安心して、ね、ぢやア歸る』』おや貴方、と申しても、また、御存じの通り、妾から伺ひかねまする只今の身分、せめて何うか、貴方のお宿だけでも知らしていたゞく事は』』いけな、い、乃公が此家を知つてさへ居りやアそれで宜いんだ、萬事は黒田が全快の上だ、ね、こゝ一月ばかりの内に、もう百圓も工面して送るから』』え、』』なぜ驚く、無用の一文を得るの道

は知らんが、必要に迫つちやア千金なほ難からざる乃公だよ』』でも御坐いませうが貴方妾等夫婦のために、もし萬々一、御無理な事を』』無理はしない、決して無理はせん、頑として愚者と一般の上田が蓬髮弊衣の一時に七十金百金を得たりとて怪しむやうでは、才氣迸發の黒田まだ一心の足らざるところありだ、これ等の事も實際に徴して全快の上、大に彼を諫める覺悟だ、ハ、ハ、ハ、ハ、時に病人の介抱も大切だが、また和女さんの身も大事だから、よく氣をつけてね』』は、はい』』風などを引くと不可んぜ、いくら氣が確固でも女の身體だ、まして多年の苦勞に疲れても居るだらうから、ね、なるべく用心するんだ、夫婦共倒れと來ちやア困るからな』』あり、右難う、御坐います』』ちやア失敬』』あの、上田さん』』む、何だ、まだ用かね』』伯父伯母とも達者に居りませうか』』む、達者だ、いづれ乃公が引き合はして、うまく調和させる時もあるさ』』何分とも宜しく願ひます、御免あそばして』』お、いよ』





まいな、ねエお清君、ハ、、、ハ、、、固より心に一物あつて態と無遠慮に吐き出したる上田が面體、じろりと尻目にかけて忽然ぶつと飴細工の如く膨れ返りぬ、『なんですとへ、婢、津なるもの、ものとは何です、しよもく上田さん、妾が一人の前なら兎も角、御主人持の清ですよ』『ハツハ、、、、しよもくか、こりやア呵しい、しよもくなら甘くツて、しよほくなら冷いぜ、しかし御主人持の清と來ちやツ一本まるツた、細君御免下さい、この清はね、どういふもんか僕の顔さへ見ると忽ち斯うです、こりやア所謂る前世の敵同士でせうか』『妾も御同様さま、貴方の顔を見ると、別に憎い事も怨恨も何にもないのに、すぐと胸先へ込み上げて來て急に嬉しくなくなりますの、ふしぎですなエ、何故でせう、ホ、、、、』

『清お別りよ、和女、悪いんだわ、お心易いにまかして失禮な事ばかり、もし外の方だツて御覽、それこそ酷い目に逢ふよ、ねエ上田さん、しかし清は御承知の氣分で御坐いますから、

どうか萬事お氣に』『いや御挨拶で痛み入る、時に細君、今日はね、少々おたのみがあつて來たんです』『おや、何か存じませんが、妾で叶ひますことなら』『無理は無理でせうが、なアに別段、むづかしい御依頼でもないです、もし和女のね、え、和女の其、何です、あのウ、おい清なるもの、ちよいと彼方へ往ツてくれんか』『お生憎さま、只今は彼方に用が御坐いませんの』『さう意地わるくいふもんでないさ、人が物を頼む時なア、さツさと氣を利かして起つもんだよ、この家鴨め』『奥様、あれなんです上田さんは、いつも妾を捉へて家鴨々々と仰しやるんですよ』『え、喧しい、ぢやア其處に居て謹聽しろ、但し家鴨の分際で横合から口を出す事ならんぞ、元來きさまに頼むこツてないから、ところで細君、少々をかきな事を問ふやうですがね、和女ア紳士の令嬢として加之も一粒種に生育ツたから、定めし立派な衣類などを澤山お持ちでせうな』『ホ、、、、上田さん、妙な事を』『いや決して妙でない、あ

るでせう澤山、あるべき筈だ』『なに貴方、澤山御坐いますものか、父があゝの通りの頑固で、妾がまた構はない方ですから、たゞ暑い寒いを凌ぐだけです』『ハ、ハ、ハ、寒暑を凌ぐに等差ありだ、とにかく和女は世間普通の婦人よりも多く持つて居らるゝものと認定します』『あらまア、そんな事を、それをお聞きなすつて貴方、どうなさいますの』『そこで、その餘分のうち、いはゞ目下不用の品で、あまり見苦しからぬもの、こりやア失敬、見苦しいもの、あるべき筈はないでせうが、まづ中等ぐらゐの小袖二枚を、頂戴したいんです』『あれ御戯談を』『いや更に戯談でない、眞實です、全くの御依頼です』『だつて貴方、良人の著替とか何とか仰しやるなら格別、また御褻衣にもなりません』『が、妾の、女の貴方、著替したものを』『いや川上では不可、是非とも和女の、それも只今こゝで願ひたい、あとから届けるの、持たしてやるのぢやア困るんです、ぢきく、僕が貰つて行きたい、是非、なるべくは和女の目で、

こりやア少々、高尚すぎると思ふくらゐの締帯が却つて結構です、是非、是非ともね細君』『まんまるの番臺面に糸のやうなる細き目を釣り上げつゝ、片唾を呑んで差控へたるお清、此時こゝぞと進みいで、例の巾着口を絞りながら、『あら奥様、お相手になさるから宜けませんよ、うつちやつて、お起ち遊ばせ、よう奥様、馬鹿々々しい、おかまひなさいますなよ』』『こら家鴨、控へろ、ささま横合から口を出さない約束だぞ』『約束も嘆息もあるモンですか、戯談も事と品に依りまさアね、うかくなさると頭上から澤庵の糖味噌をぶツかけますよ』』『や此女め、また喰つてかゝるな、こりやア細君との直談で、びよこ〜家鴨の這ひ出す慕ぢやアない、劇下の水ツ溜りへでも行けつ』『いくら奥様と直談でも、この妾が許しませんわ、あんまり悪ふさげなされると』『何が悪ふさげだ』『何がでもないもんだ、出来損ひの仁王様みたやうな怖しい顔をして、奥様の、女の著物を呉れるなんて』『え、馬鹿め、乃公が著るんぢやア

ない、人に遣るんだ』『おや、おや、おやく、おやッ』とは何が畜生おやくだ』『さア大變、いよ／＼大變、大變々々けしからんこッてすよ奥様、おき、遊ばせ、貴方の御召物を取ッて往ッて誰かに著せるんですとさ、この上田さんが、いかな僞僕も振り返りますわ、おッ魂消て呆れて驚いてよ、あらまア、押の強い事ッてば、づう／＼しい』『ハ、ハ、ハ、ハ、いかな僞僕も呆れて反り返るたア下女相應の秀句を吐きをツた、しかし上田力が女に物を遣れないといふ論鋒は何處から出た』『ホ、ハ、ハ、ハ、其お顔からさ』『この顔、この顔が美ならざる故に一切天下の婦人に度外視せらるゝたア、きさま其面なるが故に生涯世間の男子に近よるべからずといふロジックかね』『これでも破れ鍋に閉ぢ蓋、しかし男の其顔では貴方、だめですよ、いかな茶人の女も遁け出しますわ、およしなさい、だから過日も妾が餘所ながら氣をつけてあげたのです、それにまた今日、奥様の著類を戴いて遣らうなぞと、けしからぬ事、ホ、ハ、ハ、ハ、

ぐらゐの生優しい笑聲では承知出来ませんから、ちよいと奥様御免あそばせ、ワッ、ワッ、ワッ、ワッハ、ハ、ハ、ハ、『もう斯うなりやア猶更ら以ての事、もはや枝葉の雑兵に目はかけない、さア本尊、さす敵の細君、いかゞです、下さるか、下さらないか、こゝで斷然たる御返答を願ひたいッ』

芳子も今は驚き呆れて上田の顔じつと打守りしが、あまり思ひ切つたる體に薄氣味わるく、平生より一徹の氣風を知るだけに何とやら怖しく、其まゝ起ッて箆筒の抽斗より手に當りし大島袖と風通の小袖二枚、抛ぐるが如く無言に差出すや否、いき／＼と張り詰めし目の色を變へ柳眉を逆立てながら何處へか立去りぬ、

上田力さらに關せず焉、そのまゝ手を差し伸べて取らむとすれば、お清、こゝぞ一所懸命の働

所有權は移ったぞ』『いゝえ若旦那の御歸宅まで』『今日は川上に用がないんだ、放せ、放せば、おや放さないね』『放しません、貴方なぞに遣るもんですか、過日のお金といひ、放しませんよ』『や畜生、放さないと痛い目をするぞ、これまでの馴染甲斐に加減してやるもの、もし間違つて當然に打つと死んで仕舞ふぞ』『さア殺して頂戴、さア殺して欲しいわ盗賊』『盗賊ウ』『晝盗賊』

えゝ面倒なりとお清が襟首を掻い摺んで、元來の大力そつと軽く抛け出せど、元來の肥つてう撐と重く倒れて忽然むくりと跳ね起きながら、こゝぞ護身の利器を用ゐるところなりとや思ひけむ、兩手の指の爪を磨ぎ立て上田の面體を覗うて飛び付くや否、がしくと引ッ掻きぬ、『痛い畜生こら放せ、痛いといふに』『放して宜いものか南瓜野郎』

其十二

市に三虎の諺、七十圓の金は彼が性質と彼が一書に依つて更に怪しまざれど、我不在を覗うて妻に迫りつゝ、小袖二枚を提けて立去りしとは奇怪千萬、しかも妻と清とが左右より其時の景況さては其時の言葉かく委細に聞き取りて、流石の川上三吉も今は小首を傾けぬ、七十金を疑はざるは彼の七十金の必要を見ざりし以前の上田なり、されば七十金を我に乞ひし時に既に由來の上田にあらずして、小袖二枚を妻に迫つて持ち去りし時の上田と一般、もし柳に雪折れなしとの下世話を思へば、樫の木に似たる一本調子の彼、或は人よりも意外に脆く折れたるにはあらざるか、金は猶ほ可なり、上田として女の小袖二枚は不思議の極、しかも聞けば眼前火急の川に供せむとするが如き體なりしとかや、上田が女に物を遣れないといふ論鋒どこから出ると叫んで怒りし如き、なるほど、いづれの道にも彼が露骨こそ却つて

哀れなり、願はくば天生あれほどの男、あのまゝの變物として長く世にあらせし、一見その愚は愚なるに似たりと雖も、時に或は人を驚かして殆ど剃刀の刃に等しく鋭敏なるところ、また常に氷よりも冷かなる人生觀を論じながら自己は火の如き情實の燃ゆるところも、借しや竟に浮世の惡魔に喰ひ去られて一轉さらに其門生たらざるか、そもく、寒天の山河二百里を飛び來つて我を山中より迎へし彼を思へば、今ぞ誤つて岐路の闇黒に馳せ入らむとする彼を迎へて再び光明を仰がしむるものは我なり、もはや徒らに過去の彼を信じて將來の彼を放任すべき時にあらずと、川上三吉こゝに兩の腕を拱いて大の眼を閉ぢぬ、

こゝにまた吉岡町の裏長屋を我身の置き所として、多年の豪慢狂放も病のために殆ど消磨し去らむとする黒田健次、おもむろに枕を欹て、眉を擧めながら思ふやう、友を悲しんで涙を

分つは上田が性として怪しむに足らざれど、彼が身として一時に七十金を得たる手段の不思議さよ、しかも前夜の宵闇に妻を呼び止めて、なほ百金を贈るべしといひしのみか、今こゝに妻が衣手うすき霜夜の哀れを救はむとて、女の小袖二枚を人しれず抛け込みしは怪の怪なるもの、そもく、奇の奇なるもの、いづこより得しか、何として得しか、袖のうつり香いまだ失せざるは古手屋の軒に吊せしとも思はれず、折目たゞしく濕氣なくして裾の揃ひし體は正に質庫の流れを求めしにもあらず、されば猶更ら以て奇なり怪なり、あはれ浮世に馴れざる剛直一片の武骨漢、もしや我疾病を救はむがための一念に驅られて前後の違もなく、かの玲瓏たる胸中に拭ふべからざる汚點を付せざるか、逢うて語らむにも彼さらに來らず、往いて問はむにも彼さらに宿所を告げず、告げざるのみか其宿は我等がための刑場に等しき心地、あゝ何とせむ、天下百人の俗物を鑿殺にするとも彼一人をして罪人となすに忍びず、

この病、この我、さても彼がために悪魔外道なりけりと、さすがの横著者も涙を振って胸を驚かしぬ、

されど本人の上田先生は例に依って例の如く、六疊の二階に大胡坐かきながら、三尺の机に對うて二分心の豆ランプを友としつゝ、悠然たり寛々たり、洒然として天井板に嘯き傲然として壁に無言の笑を漏らし、果は酔はざるに陶然として身を横たへ、時に得意の朗吟を恣にし、時に斬聲さながら雷を欺き、入っては觀法の定座を終へし達磨の如く、出でゝは不動明王を見限つたる矜羯羅童子の如く、また布袋に等しき便々たる腹を軽く叩いて天地に我たゞ獨り尊しと叫び、また前に敵あるかのやうなる勢ひ込んで中腰となりつゝ、満身の力瘤に空を蹴ふ時は武藏坊辨慶の荒れ出でたるかと疑はれぬ、

されど上田先生をりく二階より降り來りて、宿の老爺夫婦が内職の花簪を手に取り上げながら、おもはず目を細め首を縮めて何をか深く感に堪へたる體、あゝ天下幾萬の可憐なる處女が罪を作りいだすべき戀情の記號かと咥く時は、滿面朱を注ぐが如き二十貫目の大兵さりに其身を忘れたるが如し、

其十三

川上一家のものに疑はれ黒田夫婦に怪しまれながら、上田先生いよく平然として六疊の天地に蟠る折しも、今は内務省の高等官中に聞えたる若手の逸物として上野の根岸に門戸を張れる倉橋幸藏、ふいと訪ひ來りぬ、

汐入村に膝小僧抱き寐の昔を忘れて、去るもの日々疎く貧富また隔あるべき交際ならねど、何とせむ劇賊に繋がれて更に閑暇なき倉橋が身、上田また蓬髮弊衣の一書生をもて其境涯を

害せざらむがため、殊更に逢はざること一月以來およそ四十餘日にも餘りぬ、

『やアお役人様が御來臨だな』『ハ、、、その通り、何分、俗務に縛られてね、つい無沙汰がちだ、時に上田、用がなきやア飯でも食ひに行かうか、久しぶりで君が牛飲馬食の快に接して聊か鼻についた吏臭を忘れたいんだ』『いや、吏は飽くまで吏臭たれ、敢て忘るべからざるは、僕の今日なほ吳下の阿蒙を守って其愚を脱せざるが如しだ、故に川上の何處やら紳士臭きに傾きしを咎めずさ、それは措置いて牛飲馬食の快は何時でも辭せんよ』『ちやア直と出掛けようか』『しかし何處へ行く』『どこって、まづ客分の君がお好み次第お望みのまゝ』『いくら奢る』『ハ、、、君なるかな君なるかなだ、いくらでも奢るよ、飲むと食ふぐらゐは大丈夫だから』『そりやア月給取だから安心してゐるがね、まア幾何か、ちよいと其金高を聞かしてくれ、全體、君の懐中は今日どれほど持つてる』『ハ、、、まア二十圓内外はあ

るだらうよ』『ふむん、一人の友に二飯を與へむがため備ふるところ二十金たア流石に違つたもんだな、しかし倉橋、君に一言きくがね、その二十圓を今日、僕に悉皆、奢って仕舞つても構はない氣かな』『奢るとも、全體、身體に暇さへありやア毎日でも奢るさ、二十圓づゝちやア事實に於て續かないがね、君の飲食ぐらゐるは』『僕の食ふぐらゐるって君、場處にもよるし料理にも依るが、まづ中等として一度に二圓乃至三圓ほどは必ず』『お安いこつた』『二圓五十錢づゝとして月に幾度ぐらゐる奢ってくれる、まアさ君の身に暇があるとしてさ』『妙な事をいふね、ハ、、、三日に一度ぐらゐるとせう』『一箇月に十度、二十五圓、これを四ヶ月として百圓、おい倉橋、乃公に百圓くれないか』『百圓』『敢て驚くべからず、君が僕を思ってくれるの厚情、もし月に三度づゝとして七圓五十錢、これを一年として九十圓、この間に女中の祝儀を十圓と見積つて百圓、ふしぎはあるまい、どうだ』『むゝ』『否かね』『なアに、さうちやアない、ま

た君がために百圓を惜しむの意でもないがね、聊か別に思ふところあつてさ』『思ふところ  
 たア』『いや何、ぢやア百圓、あすの朝すぐに届ける、しかし上田、その百圓を何に使ふね』  
 『他なし、たゞ牛飲馬食に費すと思へば可なりだ』『しかし上田』『こゝに至つて君、しかし、  
 など、いふ曖昧模糊たる語氣は止せよ、なだか百圓に怨靈が残つたやうで見苦しい、否な  
 ら否、應なら應だ、ハ、ハ、ハ、ハ、いはゞ君が月給の半分以下だアね、文句をいふなよ、まさ  
 か泥溝の底に叩つ込むぢやアなし』『むゝよし、ぢやア明日の朝きつと届ける』『多謝々々』

倉橋幸藏そのまゝ上田が宿を立出づるや否、車を飛ばして濱町の富田家に川上を訪ひつゝ、  
 やア遣られた、遣られた、さかさまに遣られて來たとぞ笑ひぬ、  
 川上おもはず眉を擧めながら、『やられた、君が上田にか、君が、あの上田に』『さうさ、彼奴、

汐入村の昔から妙な得意があつて、愚は其愚を守りながら愚中おのづから時に愚を用ゐて巧  
 みに人の道具外れを打つからね、なか／＼世間普通の才子よりも油断がならないぜ、大に與  
 みし易からんとところがあるから』『評し得て妙、全くだよ、穿つた説だ、どういふ鹽梅に遣ら  
 れた』『どういふ鹽梅ツて、實に、くだらない、つまらない處から急所へ喰ひ付かれたのさ、  
 最初、どツかへ飯でも食ひに連れ出して、鯉と一般、酒に痛めつけた上、きのふ君から聞い  
 た怪事を白状さしてやらうと思つたが、彼奴容易に動かない、いくら奢るの、どれほど懐中  
 にあるんだなど、例の恍けた無邪氣から釣り込まれてよ、つい百圓やられた、しかし川上、  
 明日ね、約束の百圓を彼に贈り届けて而して後さ、ハ、ハ、ハ、ハ、おもむろに計ありだ、聊か  
 私に官を用ゐるの嫌ひあるがね、幸ひ府下の秘密探偵で内務省へ出入する奴があるから、決  
 して上田の害にならないやう、僕が内命を下して、そツと百圓の道筋を探らして見る心算だ』



「面白い、面白いがね、大丈夫だらうな上田の一身上」『大丈夫、さらに心配無用、かりにも上田を傷つけるなんて、まぬけた奴ぢやアない、多年の老功、その道にかけちやア神の如しだよ』『なるほど、ぢやアそれだ』『あやまちの功名か、ハ、、、』

其十四

かくまで川上夫婦に疑はれたる今更、黒田が妻に約せし百圓の金、これを得むところ倉橋の外になしと、人しれず工夫を凝らせる折しも、その倉橋が訪ひ来りしは殆ど天の賜物、上田先生こゝを必死と斫り込んだる三寸の舌鋒に、忽ち思ひの外の功を奏して、その百圓は翌日の十時ごろ、一書に封ぜられたるまゝ内務省の小使が持ち来りぬ、  
上田これが請取の證として一通の返書を認めぬ、

御芳志の百圓、たしかに拜受いたし候、今日御歸宅の時刻を圖りて早速御禮かたく推

参仕 つるべき筈に候へども多年の御心易きに免じて御海容下されたく候、

ついではこの百金、そもく今の小生身分として何のためにするかとの御不審あるべき筈のところは、いづれ他日を待って委細に申し上げべき心底に御坐候間、こゝしばらく御見遁し下さるやう偏に願ひ入り候、實は過日川上兄にも聊か御迷惑かけ居り候折柄故、一入さらに心苦しく候へども、御承知の愚物なかゝ浮世の才子めいたる金銭瓦礫に等しき魂膽は無之候まゝ却って御安心下さるべく候、

つとむ拜

倉橋さま侍史

上田この百圓を懐中に捻ぢ込んで、其日の夜に入るを待ち受けつゝ、ぶらりと宿を立出でしが、さて何として與へむか、たとひ我と知りながら今まで忍んで逢はざりしものが、俄に訪

上田力

うて病を驚かさむも心なき業、さりとして彼がために再び得難き救命の百金を、見ず知らずの車夫に託して證を取らねば萬一の恐れあり、折しも彼が妻の外に出づることあらば幸ひなれど、わざ／＼呼び出さば却つて恩を賣るに等しと、吉岡町の宵闇を往きつ戻りつ暫し彷徨ひしが、果は思ひ切つて登音を偷みながら、路次へ入りて此家ぞと思ふ破窓より洩るゝ火影に差覗けば、死せざれど骸の如く横はりて打臥せる健次が枕頭に、妻は涙の隙よりマツチの箱を山の如くに積み立つる體、さながら浮世の無慘を訴ふるに似たり、上田おもはず兩眼を瞬泣きながら、紙に包みし懐中の百金を取出して、そつと窓の隙間より抛け入るゝや否、頭を縮めて中腰に遁け出しつ、路次口に佇んで窺へば、やがて俄に門の戸を引き開くる音、さてはと胸撫で下して敵に追はるゝ如く一散に馳せ戻りぬ、

最初の七十金に驚き疑ひ、二度目の小袖に呆れて怪しみながら、よもやと思ひし三度目の百金また窓より抛け込まれしかば、さすがの黒田も今は殆ど茫として病を忘るゝばかり、お島は猶更ら嬉し涙に咽びながら、夫婦もろとも一夜を語り明せし翌日の朝、門の戸の引き開くるを待ち兼ねて一人の男ぬつと入り來りつ、四邊じろ／＼見廻しながら「前夜の九時ごろ、この窓から何か抛け込んだものがある筈だが、ありやア前以ての知己かね、またその品物を一見したい」いひつゝ差し出せし名刺を見れば、南無三寶、姓名よりも本所警察署の五字まつ夫婦の腸を貫きぬ、

あゝ我病のためには神と仰ぐべき上田力が、あゝ我病のために一身を過つて悪魔に化せりと、かの警察署の探偵に驚いて、黒田夫婦が狂するばかりの血の涙を絞りつゝ、お島は病める良人の手を引

き健次は哀れの妻に導かれながら、吉岡町の家を去つて何處に上田を求むべきや、  
 秘密の命を傳へし探偵より上田が金の行方を知つて倉橋が今更の一驚、川上と共に始めて疑念を晴  
 せしのみか、上田の面前に叩頭萬謝して黒田夫婦を何處に求むべきや、こゝに尤も奇中の奇なるは  
 彼お清大明神と上田力が竟に夫婦となつて一子を擧ぐるの一段、  
 さらに奇中の奇なるは達磨に似たる二十貫目の大男が當歳の嬰兒を背に負うて、れんれんころりの  
 子守唄を謡ふの一段、  
 天か命か、竟に斯好漢が人生の尤も慘憺たる非業の最後を遂ぐるの一段、  
 以上あはせて『上田力』が後篇に譲りぬ、

上田 力 後編

其 一

こつくと石橋を鐵槌に叩いて耳を敬て小首を傾けし後、おそろく、其中央を犬の如く四這  
 ひに這ひ渡る奴もあれど、これはまた人間萬事を何の絲瓜とも思はず一切すべて面倒なりと、  
 前途みずの一足飛びに飛び損ねたる例の黒田健次が、うき世の深水へ落ち込んで流れ流れし  
 身の末を、やうく、本所の吉岡町その裏長屋の歪める柱一本に取り付いて、しかも病みほうけ  
 たる瘦身代に質草の種も盡き果て、泣面に蜂の巢の乾き切つたる境涯、此まゝこゝに飢ゑて  
 凍えて木乃伊にならむとせしを、連れ添ふ妻のお鳥が皮も破れし古三味線を抱へて一文一文  
 の手のうちに露命を繋ぐ淺ましさに、今は夫婦もろとも泣く音に弱り果てたる折しも、天は

汝を悪むされど汝が病を憐れむとの一言に七十圓を添へて贈りしものは誰ぞ、我を生みし親にあらす我と血を分けし兄弟にあらす、一門の縁を結べる親戚にあらす諸は舊恩を施せしものにあらず、世に知られたる慈善家にあらず人に唄はれたる名聲家にあらず、且は千金これ輕しとせる富豪にあらず多年敬畏せし先輩にあらず、伏して教へを乞ひし師にもあらずして何ぞや曾ては愚と稱し癡と卑しめ野暮と嘲り唐變木と罵り仙人殿と笑ひ、果は太古の遺物よろしく捉へて考古學者の一粟に供すべしとまで三年同居の朝夕に冷罵翻弄を極めたりし度外の鈍物、かの上田力が賜物ならむとは、此時さすがの男も思はず病める身を起して端坐しながら、窪める兩眼より瘦せ枯れたる頬に熱湯の如き涙はろくと流しつゝ、正に大罪を犯せる如き我、こゝに慚死すべき筈の我を、彼なほ捨てずして我を思ふことの切なる、あはれ何をもて其萬分一に酬いむ、さても我この病に臥して此まゝの窮巷破屋に死するとも、妻とし

てのお島あり、友としての上田力あり、さらに人間の不幸なるものにあらずと、うまれ故郷の氏神に青痰ひツかけて國を飛び出せしより十年一日さらに屈せざりし黒田健次ほどの横著物、こゝに感佩の腸を絞つて泣きぬ、

されどまた思へば怖るべし恐るべし、そもく我この病は我一人を殺すがためにあらずしてかの玲瓏たる珠玉の如き上田が胸中に拭ふべからざる一片の汚點を附せざりしか、友を悲しんで涙を分つは彼が性として怪しむに足らざれど、あはれ浮世に反いて事に馴れざる彼が身として一時に七十金を得たる手段の不思議さよ、しかも其後また妻が衣手うすき霜夜の哀れを慰めむとて、何者の餘波ぞ袖のうつり香いまだ失せざる小袖二枚を人しれず投げ込みしは怪の怪なるもの、もしや我夫婦を救はむがための一念に驅られて前後の違もなく、過つて惡魔外道に導かれざりしかと、最初の七十金に驚き、二度目の小袖に怪しむ折しも、三度目

には十圓紙幣十枚を紙に捻ひねつて意外まじの闇やみより抛なげ込まれしかば、夫婦ふうふあつと呆あきれて果はは涙なみだに咽むせびながら一夜いちやを語り明あけし翌あした日の朝あさ、門かどの戸とを引き開あくるや否いな、警察署けいさつしよの探偵たんていと名乗なりし男をとこが入いり來きりて、前夜ゆうべの九時くじごろ此意このまじより何なにをか抛なげ込みしものありし筈はず、その品しなを一見いつけんしたしといはれし時とき、健次けんじおもはず病やめる床とこより這はひ出いで、宛まがら死毒しどくを紙なめしが如ごとき顔面がめんを振り上げつゝ、さららに無なし、一切いっさいしらすと言いひ放はなちぬ、さらばまた改あらためて呼よび出だす事ことあるべしとて、夫婦ふうふが胸むねを貫つらぬきし探偵たんていの聲こゑやうく長屋ながやの路ろ次じを出いでしと思おもふころ、妻つまのお鳥とりそつと戸口とぐちに立たち出いで、四邊あたりを見廻みまはし、うちには健次けんじが男をとこ泣なきの聲こゑしのばせて齒はを咬かみ占しめぬ、

南無三寶なむさんぼう、さては病やめる我われこそ病やまひに未いまだ死しせずして、無残むざんや我われを扶たすけむとせし神かみの如ごとき其友そのとも

を先まづ殺ころしたりけり、もし事ことあらば一門もんいつけ一家いっかの親戚しんせき故舊こきう百人ひゃくにんを斃な殺ころしするとも空嘯そらうそがいて目色めいろも動うごかすべからざるほどの我われ、こゝに彼一人かれひんを罪つみとして腸はらわたを引き裂きくの苦痛くるしみありと、破やれ蒲團ぶだんひツかぶつて其日そのひ一日いちにちは男泣をとこなきに泣なき沈しづみし夕暮ゆふぐれ、妻つまのお鳥とりが涙なみだの隙ひまより豆まめランプを取とり出いして火ひを點つけながら、それにもあらぬ古箱ふるはこに手細工てさいくの泥土どろつちを塗ぬり込こんだる火鉢ひばち引き寄せ、眞ま黒くろに煤すすけたる土瓶どびんの下したより埋うづみし炭團たどん掘ほり起おこして消炭けしすみを吹ふき立たて、をのゝ袖屏風そでびやうぶに灰神樂はいかぐらを防かぎつゝ、やうく盪茶しぶちやを湧わかしぬ、

「ねエ良人あなた、兎も角かくお茶漬ちやづけでも、さう一日いちにちなんにも飲いまず食いはずぢやアいけませんよ、不貞ふてい腐くッて小面憎こづらにくい悪度胸わるどきょうを極きめるンぢやアないが、いくら今更いまさらら蔭かげで氣きを揉もんだッて別べつに仕方しかたがありませなから、もし萬一まんいちの時とき、せめて我々夫婦われわれふうふが出でるところへ出いで、精一せいいつばい、あの方かたの罪つみを引き受うけるより外ほかに思案しあんがありませんもの、あゝまるで演劇えんげきにでもあるやうだ、人ひと

運命も落ち込めば落ち込むんですねエ、身から出た錆で身が難儀するばかりか、おもはぬ人様にまで迷惑をかけてさ、なるほど妾等夫婦の方から言やア斯うなるのが自業自得で當然のことですが、あの上田さんからいふと實に氣の毒とも何とも申しやうのないこと、つまり世の中は神も佛もないんですね、馬鹿々々しいいひつゝ、そつと夜具の襟を持ち上ぐれば、古今の聖賢君子を齎顛ばして丸呑みにするほどの猛勢ありし横著物も、今は自己まづ熱湯に煮られたるが如く弱り果て、やうく青ざめたる顔を擡げながら、「もう日が暮れたのか、流石の乃公も今日といふ今日は實に、まるった、腸が九廻するたア此こつた、あゝ浮世の残酷なる人事の慘憺たる、しみぐ身に染んで其極を知つたよ、しかし今朝きた探偵ね、彼奴あのまゝだな」『追ッて呼び出すとか何とか薄氣味の悪い事を言ひ遣して往つたから、今日中に、どうかなるのかと思つて、さんざ氣を揉んで居ましたがね、あのまゝで何にも』『むゝさ

うか、そりやアそれとして、乃公が考へるにね、もはや此ま、此處には居られないぜ、どつか巢を變へようぢやアないか』『だッて良人、さう急に慌て、轉宅しちやア却ッて怪しまれる基で、結局ますく上田さんが』『いや、そこは却ッて一策ありだ、決して遁け隠れをする意味ぢやアない、大びらに本所警察署へ出て、今朝の探偵が來た事をいふのさ、しかし其節お尋ねになつた事は一切さらに存じませんが、追ッて呼び出すとの御言葉が御坐いましたから念のため轉宅の場所を届けにまゐりました、別に御用は御坐いませんかと、逆に押し寄せて行くのが此方の一策だよ、もし警察が上田に對して實際、手厳しい最中なら直ぐ其場で何とか反應のある筈だからね、其時また其事に就いての臨機應變、そかア相も變らない乃公だよ』『いえく、およしなさい、もう良人の一策とか一工夫とか臨機應變とか、そんな事は眞平御免です、相も變らぬ乃公だよは猶更の事、ぞつとしますわ』『おや妙な事をいふ、なぜだ』

「何故ツて、さうぢやアありませんか、今のやうな病氣は格別、夫婦の欲目で見るとぢやアないが、身の大事を取って世の中を眞面目にさへ渡りやア何處へ出しても立派な男一人前以上、こんな落魄れて困る筈はないでせう、いくら物價が高くツて世間の景氣が悪いからツて其日ぐらしの職人が無事に妻子を過して居る今日、何です、良人ほどの人が此さまは、つまり蟹のやうに目が上にばかり附いて猿の手のお尻に廻らないからです、いつも一足飛びに山の絶頂へ飛び上らうとするのが良人の失策、その策略とか工夫とか臨機應變とかいふ奴が悪い蟲ですよ、それも自分が獨行の事で遣るなら、底の底まで承知で連れ添ふ妾と夫婦二人ツきの難儀で済みますが、あの上田さんといふ恩人に迷惑をかけて居る最中、わざ／＼警察を敵手にして一策なンざア、けしからぬこツてす、もし藪蛇で、仕損じた時は良人どうなさる決心です』」なるほど、さうに一言なし、眞實の事だ、しかし乃公の考案は、さういふ意味

で言ツたのぢやアない、もし此まゝいつまでも貧と病に苦しんで此家に居れば居るほど、ますます上田に心配をかけて苦痛を及ぼし、つまり我々夫婦が慘憺の渦中に引き入れるも同じこツたから、いッそ今のうちに巢を變へて影を隠すのが、せめて其恩に對する心の遠慮だらうと思ふのさ、實際、上田が逮捕でもされるといふ差迫ツた場合なら、何、かう緩漫なもんかね今の警察は』」だツて良人、現在、探偵が来るほどですもの』」そこだ、そこだよ、なるほど、最初の七十圓といひ二度目の小袖といひ、三度目の百圓に至ツては實に案外の案外彼にしては怪中の怪、あまり出来すぎた放業で、おもはず首を捻ツた途端に不意の探偵と來たから、はツと思ツて驚いたのよ、しかしまた、つらく考へると、お島、やッぱり、ここが上田だよ、さア山でも海でも押し寄せて來いと人事の一切を鼻頭で冷笑ツた乃公が却ツて愚で、いはゆる仙人殿といはれた唐變木の彼が結句の大智さ、能はざるにあらず爲さる

なりといふ彼が平生の愚を以て、我々夫婦のため必要に應じたる智を用ゐるしものが即ち七十圓となり小袖となり百金となりし所以、あゝ過てり過てり、既に彼が友誼に感泣しながら、なほ彼を疑ひしは實に我の及ばざるところだつた、すまない、いよく上田に對して慚愧汗顔の至極だ、なアに今朝こゝへ來た探偵は、ふいと前夜この邊を通りかゝつて上田が窓から抛け込んだのを見たからさ、別段これといふ仔細はないのさ、もし上田に實際の怪しむべき點があつて追ひ廻すほどなら前夜その時に通すべき筈はなし、また今朝こゝへ來た時、これだけの家だもの片手で探し出すも易し、我々夫婦のうちを連れて往つて詮議する道理だ、それが其まゝ、何の音沙汰ないといふは、墓原の柳を化物と見て驚いたも同然、馬鹿々々しい事さ、しかし此まゝ、此家に居ちやア此上なほ上田を苦しめるから、どツかへ轉宅しようといふのさ、幸ひにして贈りくれたる彼が賜物の百圓、この百金を以て黒田健次が生命の有無を卜すべし

だ、百圓のあるかぎりは一意専心に養生して、全快すれば宜し、もし斃るれば天なり、お島、和女ね、上田に逢つて宜しく言つてくれ、憾むらくは生前の恩を報ずる能はずして、死んだとよ、いゝか』「えゝ、何ですよ、また、そんな事を、達者ものゝ病ひ弱りといふが、良人は格別の弱蟲だよ、しツかりなさい、妾、妾が附いて居ますよ、妾が一念は兎も角、あの上田さんが深切だけでも、きツと届いて、よくなりますからねエ』「妻としての和女あり、友としての上田あり、ぢやアよくなる心算で居ようかね』「居ようかねエぢやアいけません、その筈で居ると仰しやい』「居る、よくなる、きツと、よくなる心算で居る』「ホ、ホ、平生、ぴち／＼跳ね返つて居る時に、その百分一ほども心配氣のある人だと、かうはなりますまいに、常は大風の吹いたやうな氣性で、病氣になると女子か小兒のやうに、まるで別の人間ですよ良人は』「いや、何とも申しますまい、たゞ感謝々々』「あれ、謝れと誰がいひました』「だから謝つて



は居らないよ、しかし有難いといふのさ。ねエ、乗れば乗るべき玉の輿を打捨て、根の腐つた野中の一本杉、いつ仆れるか知れない此、へっほこ野郎の乃公に今までの艱難辛苦、和女なればこそだ』え、病人だてらに、お世辭なぞをいふもンぢやありませんよ』『ほい、また叱られたか』『あれまた、どこの世界に女房が亭主を叱る奴があります、しかし、つまらない馬鹿馬鹿しい今更めいた世辭を仰しやるからですよ、鬼婆の空念佛とやらで、いくら口頭に奉られたッて嬉しくは御坐いませんわ、それよりか妾の言葉を少しも反かないで、ちやん／＼と薬を飲んで養生をなさい、今日は少し気分が宜いと言ッちやア、いや何が食ひたいの飲みたいのと、全體そんな氣儘が出来る善の病人と思ッて居なさるの、こりやア良人、いは上田さんが血の涙で拵へて下すッた大切のお金ですよ』『わかつてる、承知してるよ』『ですからね』『だから、わかつてるよ、以後は、たゞこれと女の命に随ふのみ、決して乃公の我意を

立てないさ』『さう、さうまた良人のやうに仰しやると氣の毒でなりませんわ、ねエ、運が悪くッて事が間違ッたり、其上かうして病人になッて在らッしやればこそ、妾のいふことを、叱られるの、謝ると、え、もう、どうしたら宜からう、じれッたい、世の中は嫌だ』とよ』

其二

こゝに上田先生かの力の君は例に依ッて例の如く悠々また寛々、兩國小泉町の二階住居を天地として六疊の一室に二十貫目の大兵を横たへ豆ランプの下に古昔の君子をも凌ぐべき無垢潔白の腸を押し据ゑつゝ、現在その身を養はるゝ川上夫婦に疑はれ十年知己の友たる倉橋幸藏に怪しまれ、さては下女風情のお清が口の端に冷されながら、いよ／＼平然として猛牛の角を整す蚊ほども思はざる體、愚なるが如く智なるが如く其間に歸ッて、たま／＼天

井を仰ぎつゝ、呵々と笑ふ聲は獅子の吼ゆるに似たり、獅子なるかな、獅子なるかな、よしや時に誤つて浮世の鼠輩に輕んぜられ、また或は事に當つて聊か滑稽じみたる失策はあれども、敢て陰險なる猫の類にあらず利發めいたる猿の流にあらず汚醜の塊に等しき豚の派にあらずして、その一舉一動は悉く自己が眞情より溢れ出で、その一言一句は總て自己が肺腑より湧き出でつゝ、癡鈍なるが如くにして犯すべからざる英氣を蓄へ、茫として知らざるが如き中に自ら大觀の風を備へ、五月人形の武者に似たる肩、鷹に似たる黒目勝の大目玉、唇端は夜具の袖に似たれど容易に開かず、鼻は其本體を現して香爐獅子に似たれど凡俗の手に觸れしめず、聳ゆる兩肩の山を怒らして鐵の盾に似たる胸板を突き出し、張り切つたる腰骨の岩乗さは角力道に羨まるゝばかり、無心に立てる兩脚さへ地の底に根を持つかと疑はれて、身材五尺八寸、腹の太さ四尺二寸、蛆形の下駄を踏んで

例のステツキを携へながら夕暮の空に何處を的もなく見渡しつゝ、のツそりと立ち出づる體は宛然たる古壯士の風采、天生その醜男よりも其立派さに見惚れて往來の人に驚かれぬ、

黒田健次その者は飽くまで憎むべき奴なれど、その疾病や憐れむべし、その妻の心や憫れむべしと、上田が本性さらに人一倍の苦痛を忍んで、潔白の我身を多年の知己たり現在の恩人たる川上夫婦さては倉橋幸藏に疑はれながら、人知れず三度これを救ひし後の彼は何とせし、世に捨てらるゝほどの子は猶も可愛き親心、新舊ともに呆れて誰一人の扶助なき友は猶も憐憫の至極ぞと、一日の夕暮、ぶらりと立出で、途上の思案とりくゝ、やがて吉岡町のこゝぞと思ふ路次口より、あれでも良人は涙片手の世話女房が夜に紛れての買物にでも出で来るかと、例のステツキを小脇に抱へながら宵闇の中腰に猪首を差伸べて續く長屋の奥を窺ふ體、

浮世の義理人情でなるべき業か二十貫目の大男、宛ら小兒の戯事に隠れん坊の鬼を探るに似たり、

されど人の出で来る氣配なければ、せめて窓より家内の様子を差覗かむと、物を偷むが如く登音を忍ばせて、そろ／＼路次の奥へ進み入りつゝ、此家なりけりと軒端に佇めば、いつも戸の隙間より漏れ来る火影なく寂として音もなし、まだ夜は更けざるに夫婦もろとも、はや眠れるかと思ひながら、さて戸を叩いて驚かすべき用もなければ、またもや其まゝ登音を忍ばせて立歸らむとする時、隣屋の戸口がらりと引き開けて出でしものあり、骨と皮なる瘦身代の此裏長屋にも賊といふものを恐るゝにや、はつと上戸が姿に驚いて透しみながら、誰だ誰ぞと咎めぬ、

薄闇がりに登音しので入り込みし大兵の我、聲たてられなば面倒なりと、俄の小聲に會釋

しながら、「この長屋に黒田といふものが居りますか」「黒田、そりやア隣屋に住んで居た病人だが、二三日前、どっかへ轉宅しましたよ」「や、轉宅、どこへ、何處へ移りました」「どこつて、近處へも挨拶なしの唐突ですから、わかりませんな、しかし差配にでも行けば知れるでせう、差配ですか、そりやア田中といつてこの路次口から右へ四軒目の二階家ですよ」「ありがたう、ぢやア其家で聞いて見ます」

さては黒田奴、我に會はずべき面なしと恥ぢて去りしか、但しは我に此上の氣を揉ませじとて去りしか、我は兎も角、我口より川上倉橋などの舊友に漏れては面目なしとて去りしものか、かつて我が棲む宿の主人を斯くぞと知らせしがため夫婦もろとも驚いて去りしものか、いづれにせよ、恩に狎れずして恩を謝し加之も恥を知つて其身を隠せしは彼奴いまだ腸まで腐らざりけりと、何とやら俄に一入の哀れを催しながら、聞き及びし差配の家に就いて問へ

ば家賃こそ滞らねども其他に人しれぬ不義理でもあつてか夜遁け同然、壁一重の隣屋さへ知らぬうちに去りしとぞ答へぬ、

恥ぢて去りしものを追ふは我が志ならねど、彼が疾病の経過いかなりしぞ、例の百金をもて眼前の急を救ふに足れども、さて其百金の盡きし後を何とかする、願はくば病の平癒と金の消費と伴へかし、病いまだ癒えずして金の盡くる事あらば彼の不幸、金いまだ盡きずして癒ゆれば彼の幸福、吉凶ともに天にあり禍福ともに命なりとはいへ、せめて其極を見たかりし、もし今こゝに去るならば我また別に思ふところあつて頂上の一針、彼が身の病は醫藥に託すれども彼が心の病は療治してくれむものを、なまなか病中の苦心を察し連れ添ふ妻が心に感じて、さらに一度も得逢はざりしは無念なり、さてもいづこへ往きしぞ、天生の才氣迸つて物に屈せぬ奴ながら、あれほどの病に臥し一弱り果てたる身を今更ら運びし苦痛さ

ぞや辛かるべく、また其良人を扶けて涙と共に立ち出でし妻が心の哀れさよ、かくと知らば不意に押し掛けて一時は枕頭を驚かすとも、言ふだけの事を言ひ聞くだけの事を聞きし後、親しく朝夕を訪うて介抱してやらむに、惜しき事してけりと、上田力おもはず兩眼をしばたきぬ、

戀人の去りしあとならねど、何とやら哀れに床しう、もの失ひし心地して名残惜し氣に立ち歸りつゝ、やうく我棲める小泉町の路次口に入らむとする折しも、日和下駄の音からころと近づきし提灯の火は正しく富田家の紋所、さては川上よりの使者かと思ふに其處に其ま、佇めば果して例のお清、『おや上田さん、今頃どちらへ』『やア誰かと思ふに及ばず、地響き打つて大道の顛け来るが如きは正にはお清君たるを知る』『あらまア相も變らず酷い事を仰しやるよ、しかし何處へ』『何、どこへも行くンぢやアない、あんまり夕飯を食ひ過ぎたから二時間ほど

影<sup>かげ</sup>射<sup>さ</sup>して歸<sup>かへ</sup>つて來<sup>き</sup>たところだ、時に川<sup>かわ</sup>かね、川<sup>かわ</sup>なら此<sup>この</sup>ま、此<sup>この</sup>處<sup>ところ</sup>で聞<sup>き</sup>かう』『はい、ちよいとね、もし御<sup>ご</sup>差<sup>さ</sup>支<sup>し</sup>なくば、すぐ來<sup>き</sup>ていたゞきたいんで、お迎<sup>むか</sup>ひにまゐりましたの、あの倉<sup>くら</sup>橋<sup>はし</sup>さんも入<sup>い</sup>らッしやいますは』『ふむん、倉<sup>くら</sup>橋<sup>はし</sup>が來<sup>き</sup>て居<sup>ゐ</sup>る、そして川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>が乃<sup>おの</sup>公<sup>こう</sup>に今<sup>いま</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>、わざゞく迎<sup>むか</sup>ひにふむん』『さやう』『いやだ』『おや』『今<sup>こん</sup>夜<sup>や</sup>ア嫌<sup>いや</sup>だ、よしにする、また明日<sup>あす</sup>の朝<sup>あさ</sup>にでもなッて氣<sup>き</sup>が向<sup>む</sup>いたら行<sup>ゆ</sup>くと、さう言<sup>い</sup>ッてくれ』『だッて貴<sup>あなた</sup>方<sup>た</sup>、わざゞくお迎<sup>むか</sup>ひにまゐつたんですから是非<sup>ぜひ</sup>とも、倉<sup>くら</sup>橋<sup>はし</sup>さんが何<sup>なん</sup>だか頻<sup>しき</sup>りに、お待<sup>まち</sup>兼<sup>か</sup>ねの御<sup>ご</sup>樣<sup>やう</sup>子<sup>す</sup>です』『誰<sup>だれ</sup>が待<sup>まち</sup>ッて居<sup>ゐ</sup>ッても今<sup>こん</sup>夜<sup>や</sup>は嫌<sup>いや</sup>だ、少<sup>せう</sup>々<sup>く</sup>氣<sup>き</sup>分<sup>ぶん</sup>が惡<sup>わる</sup>い』『ぢやア來<sup>き</sup>ていたゞけませんの』『然<sup>しか</sup>り』『ホ、ホ、また妙<sup>めう</sup>なことを仰<sup>おほ</sup>しやるわ、つい兩國<sup>にこく</sup>橋<sup>はし</sup>たッた一條<sup>いっとう</sup>を渡<sup>わた</sup>れないほど御<sup>ご</sup>氣<sup>き</sup>分<sup>ぶん</sup>の惡<sup>わる</sup>い貴<sup>あなた</sup>方<sup>た</sup>が、よくまア今<sup>いま</sup>ごころまで、てくく二<sup>じ</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>も何<sup>なん</sup>處<sup>どこ</sup>をお歩<sup>あ</sup>きなさいましたの』『え、うるさい、嫌<sup>いや</sup>だ、いやだといふに、歸<sup>かへ</sup>れ、婢<sup>ひ</sup>、清<sup>きよ</sup>なるものが呖<sup>た</sup>りに嘴<sup>くちばし</sup>を容<sup>ゆる</sup>るところでない、歸<sup>かへ</sup>れ』

其<sup>その</sup>ま、打<sup>うち</sup>捨<sup>す</sup>て、路<sup>ろ</sup>次<sup>じ</sup>の奥<sup>おく</sup>なる我<sup>わが</sup>家<sup>や</sup>に入<sup>い</sup>らむとして振<sup>ふ</sup>り返<sup>かへ</sup>れば、お清<sup>きよ</sup>また其<sup>その</sup>あとについて入<sup>い</sup>り來<sup>き</sup>りぬ、『おい歸<sup>かへ</sup>らないか、今<sup>いま</sup>、言<sup>い</sup>ッた通<sup>とほ</sup>りの返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>をすれば宜<sup>い</sup>いんだ、歸<sup>かへ</sup>れ』『いえ歸<sup>かへ</sup>りませんわ、夜<sup>よ</sup>露<sup>つゆ</sup>を浴<sup>あ</sup>びて二<sup>じ</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>も散<sup>さん</sup>歩<sup>ぽ</sup>なさるほどの御<sup>ご</sup>元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>で兩國<sup>にこく</sup>橋<sup>はし</sup>を渡<sup>わた</sup>れないといふやうな辻<sup>つじ</sup>褌<sup>つぽん</sup>の合<sup>あ</sup>はない御<sup>ご</sup>返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>は出來<sup>で</sup>ませんから、どうしても貴<sup>あなた</sup>方<sup>た</sup>をお連<sup>つ</sup>れ申<sup>まう</sup>しますの』『こら下<sup>げ</sup>女<sup>ぢよ</sup>、また明<sup>あ</sup>りに狎<sup>な</sup>れて恐<sup>おそ</sup>れ氣<sup>き</sup>もなく神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>を犯<sup>をか</sup>し居<sup>ゐ</sup>る、けしからん女<sup>ぢよ</sup>だ、這<sup>は</sup>入<sup>い</sup>る事<sup>こと</sup>ならんぞ』いひつゝ門<sup>かど</sup>の戸<sup>と</sup>に音<sup>おと</sup>たて、閉<sup>と</sup>ぢながら、自<sup>おの</sup>己<sup>の</sup>が六<sup>む</sup>疊<sup>でふ</sup>の二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>に走<sup>は</sup>せ上<sup>あ</sup>ッて耳<sup>みみ</sup>を敏<sup>み</sup>つれば、はや入り來<sup>き</sup>ッて宿<sup>やど</sup>の主人<sup>あるじ</sup>夫婦<sup>ふうふ</sup>と語<sup>かた</sup>る聲<sup>こゑ</sup>すでに高<sup>たか</sup>し、我<sup>われ</sup>にあらずんば眼<sup>がん</sup>前<sup>ぜん</sup>の急<sup>きふ</sup>を免<sup>のが</sup>れ難<sup>がた</sup>き友<sup>とも</sup>のためには、よしや其<sup>その</sup>友<sup>とも</sup>いかに平<sup>ひ</sup>生<sup>ころ</sup>の憎<sup>にく</sup>むべき所<sup>しよ</sup>爲<sup>なる</sup>ありとも我<sup>われ</sup>これ捨<sup>す</sup>つる能<sup>あた</sup>はず、されど我<sup>われ</sup>より以<sup>い</sup>上<sup>じやう</sup>の境<sup>きやう</sup>遇<sup>ぐう</sup>にあッて我<sup>われ</sup>を要<sup>え</sup>せざる許<sup>もと</sup>へは、真<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>いかに恩<sup>おん</sup>人<sup>じん</sup>たりとも何<sup>なん</sup>すれぞ意<sup>い</sup>を枉<sup>か</sup>けて馳<sup>ち</sup>走<sup>そう</sup>するに足<sup>た</sup>らむ、事<sup>こと</sup>もし行<sup>ゆ</sup>かで叶<sup>かな</sup>はずば彼<sup>かれ</sup>より來<sup>き</sup>

るべし、恩を記し恩に酬ゆるは人間また別に感謝の法あり、いたづらに起居動作の輕快を以て響の聲に應ずるが如きは凡俗小人の常のみ、まして今夜は何とやら嫌なり、事すでに下女風情の口頭をもて迎へむとするほどの輕舉、何ぞ俄に差し迫りし彼我の大事なるべき、いざや寢てくれむと机の上の豆ランプを吹ッ消して、其ま、押入の夜具を引き摺り出すや否、枕を取ッて鼾聲こゝに雷を欺くべき前口上、まだ無言の鼻息あらく野猪に似たり、折しも二階の梯子段みし〜と音させて上り來りしお清が、まッ闇がりの中に立ッて鼻息する方に対ひつ、『あら上田さん御戲談ぢやアありませんよ、全く何か貴方に御相談がある御様子で倉橋さんも御越しになつてるし、外のものぢやアいけないからッて妾が、わさ〜お迎ひに來たんですから、是非とも、ねエ上田さん』『やかましい、扣へろ、將に君子が睡眠に就かむとする時は大智大徳の定座觀念に等しいくらゐるものだぞ、さるを凡俗みだりに犯し奉

ツて何とする』『だッて貴方、妾が困りますから』『おぬしの困るぐらゐで乃公が起てるもんか、失禮千萬な女だ、第一あの倉橋の如きは蒲鉾と一般、どこへ行くにも板の上に喰ッ付いて、自己が手足を勞せず自川車で馳け廻る奴だから用がありやア直ぐ此家へ來るが宜い、また川上夫婦の如きも夜陰わさ〜乃公を呼び寄せるほどの事なら下女風情が一片の口頭に託せずして正に一書を齎すべき筈だ、それに何ぞやといふ理窟は兎も角、何だか今夜實際に嫌だからね、ひらに御免を蒙るのさ、沈黙々々、もう斷じて言語は交さないぞ』いひつゝ、寢ながら眼を光らして階下より反射する薄火影を見上ぐれば、お清さらに屈せざる顔色、敵の内兜を見透したるが如き冷笑を含んで、家鴨に似たる尻を振りしは豫て覺悟の武者振ひ同然、じんわりと二階の上り口に坐しながら、そろ〜膝頭を漕いで枕頭へ近寄り來らむとする體に、鬼とも組むべき上田力おもはず夜具を打被ッて五體を締めつ、『おい、こゝら、きさま、ぶん

なぐるぞ畜生、蹴飛ばすぞ』『おいでも、こらでも構ひますもんか、今夜もし貴方が来て下さらない以上は、こゝで此まゝ泊めて貰ひますわ、御迷惑でも、お夜具の裾を借りまして、しかも妾は寝相が悪くツて夢中に顔け廻りますから、もし萬一、ひよつと貴方の衾中へ藻ぐり込むかも知れませんよ』『いやはや此女め、呆れ返つた阿魔ツちよだ、驚き入つた女郎だ、つうくしいと言はうか、けしからんと申さうか、實に言語道斷、吐するに言なく、處するに方なく、論にも齒にもかゝらない難物だ、所詮、度すべからざるの代物だな』『それ御覽なさい、それほど貴方お困りなさるなら来て下さい、わざ／＼お迎ひに来たのですから』『閉口、降参、まるツた』『ちやア来て下さいませぬ』『往くよ、往くツてば、直に行くから先づ階下へ降りて待つてろ、あ、酷い女だ、逆も叶はない、無効々々、天下たゞ我の恐るゝところ君あるのみだ、實に剛敵と謂ひつべし、殆ど怪物だな、きさまは』

荒土の仁王に魂ひ宿つて這ひ込むとも、ぐいと首骨を抱き占めて寐るほどの男ながら、そろ／＼近寄りむとせしお清が勢ひに恐れて飛び起きつゝ、やう／＼階下に降りてみれば、はや門口に提灯を携へて待ちぬ、

『さア上田さん、まゐりませう』『ハ、ハ、ハ、いよく／＼やられたね、君に對しては以後さらに一言なし、乃公の權威すでに地に墮ちたりだわい』『今更ら文句を仰しやらないで、早く貴方あんよをなさい』『あんよ、あんよたア何だ、妙なことをいふね』『ホ、ホ、ホ、お歩きなさるこつてすよ、可愛らしい小さな其お御足で』『や此奴、すでに與みし易しと見て取つて、ますますふさげるな』『これは失禮』『失禮で濟むか勿體ない、苟も乃公に對つて』

やがて兩國橋を渡りながら前後を見れば、いつしか夜は更けたり往來の人も絶えて、岸に臨める樓々櫺比の火影ちらほら流るゝ水に砕けつゝ、近くは橋下を漕ぎ行く舟の櫓拍子さへ何

とやら面白く、うき世の外の別世界あれこそ柳橋と思ふ方より戀の色香は送らねど三味の音  
 じめの幽に聞ゆる風情、さすがの上田も思はず歩を止めて振り返りぬ、『どうも宜いね、俗  
 物が絶え間なく踏み鳴らして遠雷の響を聴くに等しき肩摩殺撃の兩國橋も、かう夜が更けて  
 殆ど其景物を一變したところ、俄に詩人めいて二州橋とでも言はざるを得ないね』『眞實です  
 よ、此兩國ほど塵埃ッほくツて往來の雜沓するところは御坐いませんが、また夜が更けた景色  
 は別です、それに月のないのが却って何だか情が深いやうで、寂然としますよ』『や、お清君  
 なかく話せるわい、この兩國を賞するに川開きの花火でも持ち出すかと思ひの外、月なき  
 を以て更に一段とは、實に侮るべからざるの言だ、なるほど、人は外觀によらない詩趣のあ  
 るもんだな』『ホ、、、、久しい御馴染ですが、妙な事で始めて貴方に褒められましたわ、  
 しかし上田さん、あれ、あれを御覽なさい、あれが龜清と柳光亭で、此方が生稻でせう、

そして今ごろまで好いた藝妓の爪弾で浮世しらすの微醉機嫌は全體どんな男でせう、かうな  
 ると女は無効ですよ、なぜ妾は男に生れなかつたらうと口惜しく思ひますわ、お金さへあり  
 やア自由自在の世の中とはいふもの、女ちやア少々困りますからね、貴方だつて上田さん、  
 幸ひ男にお生れなすつたればこそ、もし女で貴方のやうな人が出来たら、どうでせう、随分  
 と納めどころのない御荷物ですぜ、まア淺草の公園で女の力持か何ぞより外に用のない方  
 すから』『いや此女め、ちよいと譽めると直ぐ附け上つて無禮の言を發する女だ、元來あの三  
 味なア汚穢なる淫情を鼓舞するの樂器で、つまり俗界の鼠輩が喜ぶところだ、また藝妓  
 は其鼠輩が玩弄物で、唯これ銅臭の多寡に依つて、媚態の輕重を呈するもの、その清淨無垢な  
 る點よりいへば當時あの柳橋にありとあらゆる數百の美人が香粉の隊を組んで押し出しても、  
 お清君、君が一人の尊きに及ばないんだぞ、だから、あんなものを羨まずに、みづから信す



ること高くして確乎しろ』『おやまあ、柳橋の藝妓が總出で押し掛けて来ても、妾一人の方が上田さん、えらいんですか、あの妾一人の方が』『さうだ、かの金殿玉樓に住んで肥馬輕車を驅る當世得意の奴等が千百の群をなして来ても、破帽弊衣の乃公一人に如かざると同じこつた』『ちやア上田さん、及ばざる如かざる同士で、いッそ貴方と妾と夫婦になりませうか』『馬鹿、かりに物の比喩を言ッて比較したばかりだ、實際に於ては天地の差があるわい』『ホ、、、、眞平御免、妾の方から』『や、また吐したな』

濱町の富田家に至りしころは夜の十二時、はや玄關の戸は閉てたり、お清まづ入りて勝手口より案内せむとすれど、上田先生さらに動かす、『おい玄關を開けんか』『だッて貴方もう夜が更けて居りますから、甚だ失禮ですが、どうか此處から、第一お手間が取れますよ』『いや手間が取れても構はん、開けろ』『開けろと仰しやれば開けますがね、倉橋さんだッて夜が更け

ると此處から出入なさいますよ』『だまれ、人の事はいふに及ばん、乃公は別だ、面倒なら歸る』『まあ意地のお悪いこと』『はやく開けい』

お清そのまゝ奥に入りて通じけむ、やがて玄關の戸を引き開けて迎へしは川上三吉と倉橋幸藏、『やアよく来てくれた、夜中に失敬だが、何分晝間は忙しい身體だからね、まづ今夜ア汐入村以來、久しぶりに三人が枕を並べて夜と共に語る心算さ』『ハ、、、つまらないこッて夜中わざ／＼君子を引き出したね、しかし今更ら歸るのも面倒だ、ちやア泊り込み、いや談し込むとせう』

三人もろとも奥の一室に打通れば、かねて待ち受けたる茶菓の饗應は勿論、殊更ら上田がために設けたる酒飯の用意さへ整うて、川上倉橋の二人が何とやら改りし慇懃さに、力先生じろ／＼見渡しながら、『何は儲置き、この室に入るや否、忽ち乃公の鼻を衝いて堪へざらし



横に突ツ張ツた奴で、由來さント我々に不快を與へた今日だから、まして彼が自業自得、別段その落魄に涙を注ぐべき價値もないがね、さて人生の尤も慘なるものは疾病で、病痾は善人悪人ともに苦しむところ、そこで天は汝を惡む、されど汝の病を憐れむといふ主意から兎も角まづ及ぶだけの事を仕てやツたのさ、もし謝すべき點からいへば僕こそ君等に對して謝らなければならんよ、何となれば多年この上田が愚を憐れんで扶けてくれる君等に一言の相談もせず、しかも平生の賜物を割いて與ふれば猶かつ可なりといふべきところを、別途さうらに其賜物の幾倍を強ひて竊に他へ運んだ始末、いは謀ツたも同然の結果だからな、しかし輒斷の急を救はずして枯魚を市に買ふの遺憾あらむかと思つての事さ、いやもう黒田は實に困ツた奴だよ』

川上倉橋の二人いよく感に堪へたる體にして黒田の病氣は、どうだね、第一また君に對つて何と言ツてる』ところかね、いまだ一度も逢はずさ、たゞ其妻なるものに様子を聞くばかり、また物を送るにも萬事そツと投げ込んでやツたのだからな、誰だツて直接その落魄を舊友に訪はるゝは餘り心持の宜いもンぢやアあるまいし、まして病中のこと、元來が負けない氣の彼奴が瘦我慢を驚がして其病痾を刺撃するのも可愛さうだから、一切すべて陰ながら盡してやツたのさ、しかし今日、夕方ちよいと往つてみるとね、彼奴すでに去つて、どツかへ往つて仕舞ツたよ』『ふむ、まだ例の癖が止まないな』『いや今度のは例の癖ぢやアあるまい、いくら黒田でも少しは心に感じて、氣の毒に思ツたがらだらう』『だらうかね、彼奴が性として』『いや居堪まらない理由が外にもある、殆ど一編の小説的に組んだやうな不思議の廻り合はせて實に奇な事があるんだ、しかし彼等夫婦のため僕は今こゝで言ふに忍びない、もし口を開けば唯一言、彼が妻を憐れむのみだ、なるほど最初は野合で出來た女だから、さらに容

を改めて敬愛すべき點はないがね、あの容貌と才氣とを以て世に求むれば所謂玉の輿は容易なるべき筈を、黒田が如き醜男にして加之も人事に不節調の行爲を極むる奴に伴うて、多年幾何の失敗に驚かず、由來さまざまの艱難に屈せず、輾轉落魄のあまり萬事こゝに休して其病に臥せる良人を涙片手に介抱する體、實に目も當てられん、風雨の晨も霜雪の夜も寒中の古拾一枚で破三味線を抱へながら、人の軒に立ッて唄ふ聲は正しく慘憺たる悲鳴と一般、そもく黒田のやうな奴が何として彼の如き貞婦を持つか、かの貞婦また何として黒田の如き良人を持つか、僕が殆ど一身の潔白を犠牲として同情を寄せたのは實にこゝだ、始めて兩國橋で出逢ッた時、その良人のために手を合はして流涕淋漓、どうか僕に今の境遇を訪うてくれるなといふのよ、この上なほ三年は是非とも見遁してやつてくれと拜まれた時、さすがの僕も鐵腸ために寸斷さるゝの感があつたね、君等もまた他日あの妻に逢へば必ず黒田を責

むる鋒刃か鈍るよ、是に於てか思ふだ、黒田は才機横溢して世に容れられざるもの、僕は魯鈍愚直にして世に容れられざるもの、その人後に落ちて竟に事を成し得ざるは同じ結果の厄介物だから、願はくば彼が如き可憐の妻を持ちたくはないね、須らく自己を制して女に於ける萬一の僥倖を避くべしだ、あたら婦人の徳を闇黒に没して其生涯を涙で流さすは實に残酷だからね、僕は斷じて無妻主義を取るに極めた、もし子でも出来て見ろ、その子は更に其妻よりも不幸慘憺の極だからな、ハ、ハ、ハ、ハ、ついで枝葉に涉ッて自己が注文の簡單に反した、失敬々々、ところで酒もなし肴も盡きたり、もう寢ようかね、久しぶりぢやアない、いまだ嘗て知らざる絹夜具の肌心地といふもなア、どういふ鹽梅か、ハ、ハ、ハ、ハ、同じことなら當家にあるだけを盡く引ッ張り出してくれ、なアに息が詰ッても構はない、まッ裸體で埋ッてみるんだ、二十貫目の大男どこに居るか分らないやうに藻潜り込んで明日の朝あの清めを驚かして

やる心算だ 元來あの清なるもの、けしからん女で、汐入村以來の關係、どういふもんか僕の面さへ見ると忽ち喰ッて掛ッて氣焔を吐きをる、しかも臨機應變曲折轉々の妙を盡して其鋭鋒の當るべからざる勢ひ、ありやア天性の雄辯家だな、殆ど古今下女の魁だぜ、ハ、ハ、ハ、しかし氣の宜い女で、あれと喧嘩してゐる間は別に一種いふべからざるの快を覺えるね、事に罪がなくッて舌に毒を含まないからな、ハッハッハッハッ』夫子みづからも事に罪なく舌に毒なくして小兒に似たる時あり、

其三

春は俗なりといへども春そのもの、俗なるべき筈なく、たゞ瓢箪の川流れ浮かれて浮いて出る奴の俗なるのみ、山野の景色、こゝに天眞爛漫として迎ふれども、市井の鼠輩、こゝに俗氣満々として騒ぎ出すのみ、されど人間また平生の調子外れに度を失うて狂ふところ却ッて一興あり、鏢一文の争ひに爪を磨ぐ熊鷹老爺も老を忘れ慾を放れて酒に酔ひ花に戯れつゝ家も庫も子息も證文も入らぬと叫ぶところ殆ど奇中の奇なり、さては蟲干同然に深窓の佳人も箱を出で、一年一度の笑を漏らす風情、乞食非人も一刻千金の春を我物として落花狼藉の夢に睡る風情、貧富貴賤の差別あるべきや唯これ春といふ花の徳、さらば我もまた其春を訪ひ花に謝して俗物の調子外れを見物せむと、上田先生いづこへ行くにも一片の理窟をつけて天地鬼神に恥ぢざるの勢ひ、時ならぬに一升飯を七分まで喰ひ込んで便々たる腹を叩きながら、ぶらり／＼と立出でぬ、

兩國の河岸傳ひに厩橋を過ぎ吾妻橋を過ぎて、白髪三千丈的に唄うたる墨堤十里の雲か雪か、小梅橋上より見渡せば所謂調子外れの俗物ぞろ／＼と打續いて花のトンネルを蠅蟻の傳ふが如し、しかも人間の愚なる、古今の綺羅錦繡をあつめて身に纏ふとも散り來る一輪の

花辨に如かざる花に對ひながら、老幼男女いづれも今日を晴と著飾りて眼前の衣香扇影に得々たる體、や、いよく凡俗の天下、逆も度し難い奴等ぞと獅子鼻に冷笑ひつゝ、色ざめたる茶褐色の鍔廣帽子を阿彌陀流にいたゞいて、ところなく綻びたる薩摩飛白の綿入羽織に素肌のまゝの袷一枚、例のステッキを左手に携へ用なき右手を一文なしの懷中に捻ぢ込で、いつもながら五尺八寸二十貫目の大兵、山の如き兩肩を怒らして悠々と歩みだせば、今を盛りの花に映じて一際すぐれたる怪物、むかし叡山の荒法師に似たる顔面ぬツと群集の頭上に飛び出で、美人は怖れ小兒は遁け出し爺婆おどろいて酒亂の奴まで思はず道を護りぬ、

三圍の鳥居わづかに土堤より差覗いて夕暮の名に負ふ待乳山に對ひつゝ、一葉の舟に棹さして見返る竹屋の渡頭も、今日は花に溢れし人浪を打って平生の風物さらになく、牛の御前、長命寺、柳畑の裏田甫より白髯社頭の本道まで唯これ花と酒との合戦、人と唄とに亂れ狂うて隙間もなき其中を、おのれ獨占の天地に等しく上田一人ぬツと肩より以上あらはれたる後姿に、折しも川上の妻女が一目に其人と見て例のお清を振り返りながら、『ねエ清、ありやア上田さんだよ』『おや眞實、上田さんに違ひ御坐いませんわ、こんな雑沓の中で見ると常よりも大きい圖抜けさが取別けて目立ちますことね、あらまア威張り返ッてさ、あの肩幅を御覽遊ばせ、しかし妙なモンで御坐いますね、あんな變屈な人でも春は宜い心持と見えて、つい我しらす浮かれ出したのですよ、ホ、ホ、ホ、』『和女、ちよいと駈け出して、後背から不意打をしておあげよ』『いけません、およし遊ばせ、あんな人ですから、どこでも構はずに破鐘のやうな聲を出して、やア家鴨の花見かなぞと吐鳴られちやア貴女、いくら妾だッて、きまりが悪う御坐いますから、觸らぬ神に祟なし、知らない振をしてまゐりませう、あの通り

首から上が飛び出して人の頭ばかり見て居ますから、この混雑の中で見付けられる氣遣ひは御坐いませんよ』『だって折角、かう知って居ながら黙って居ては悪いよ、また上田さんのこつたから、どうせ御不自由だらうし、幸ひ三人で、どツか人の知れない料理屋へでも、ねエ清、花も宜いが斯んなに歩いてばかり居ては草臥れてならないよ』『なるほど、それも然うで御坐いますね、しかし妾ではいけません、恐れ入りますが貴女ちよいと、いくら上田さんでも貴女には、まさか人中で悪まれ口も』『ちやア清、少し早くね、追ひ附いて背後から驚愕させてあげよう』

人なき大道ならば横行闊歩の上田なれど、かくとも知らねば悠々また寛々、此方は混雑を摺り抜けて女の小歩ちよこく、やうく追ひ附いて妻女まづ其背を叩けど、苧殻もて磐石を打つが如く更に感ぜざる體、再び押せども應へず、三度そつと突けども猶しらねば、お清しきりに妻女の袖を曳いて目配せしながら、思ひきり捻ッておやり遊ばせといふ、されどこの往來でと躊躇ふ顔色に、お清おもはず進みいで、平生の敵討この時なりと満身の力を指頭に込めつ、五斗俵に似たる臀の邊りを爪と爪とに挿んで、ぐいと捻りあぐれば流石の上田も驚いて振り返りさま、何者と思ひの外なる川上の妻女とお清、ホ、と笑うて『おや上田さん』『む、誰かと思つたよ、やア家鴨も来て居るな』お清ぶつと膨れて四邊を見廻し顔を根めながら、『上田さん、こゝは混雑ですよ』『ハ、ハ、ハ、ハ、さうだったね、こりやア悪かつた、時に今日は大變な人出だな、しかし此奴等ア皆、花を見に来たンぢやアない、一年一度の大酒うち喰ッて酔ッぱらひに來せた俗物どもだから困るよ、中には随分よくない悪戯な野郎があるから氣をつけなさいよ、第一こんなどころへ若い女二人で來るといふことがあるもんか、聊か淑徳を缺くの恐れありだ、また來るなら車夫か書生でも連れて來れば宜いに、しかし幸ひ

僕の背後に附いて居れば大丈夫ハ、ハ、ハ、ハ、さらぬも一際すぐれて目立ちし大男が、四邊かまはぬ傍若無人の大聲に叫んで笑ひいだせば、いづれも驚いて其顔を打守りつゝ、川上の妻女も人中で叱られたるが如き心地して思はず差俯きぬ、

お清いよく不平の顔色、それ御覽遊ばせ、時も場合も遠慮會釋のあるべき人かと、今更ら怨めど悔めど詮方なければ、一時も早く人なきところへ連れ出し酒で殺して置いて遁け出さむとの計策『ねエ上田さん、貴方どこまで、いらつしやいますの』『どこつて的もないが、まア花のあるかぎり飄然茫然ぶら〜と行く心算さ』『しかし貴方、どツかへ休みませうかね』『さうだな、別に草臥もしないから休むにも及ばないが、ハ、ハ、ハ、思召があれば御馳走し給へ』『いたしますとも、失禮ながら御馳走しようと思つて、わざ〜混雑の中でお呼び申したんですよ、ねエ清』『さうですとも、上田さんのこつてすから、どうせ飢饉年のお花見、

定めし御空腹で在らつしやるだらうツて』『こら下女また、けしからん事をいふよ、荷も出がけに一升飯を喰つて来たから腹は便々だ、しかし酒なら少々かまはないぞ』『あれ上田さん、そんな事を』『何、かまふもんか、我琴を弾じ我笙を吹くだ、しかも其飯がね、出来損ツて半粥と半焦の混合物で頗る閉口したよ、ハ、ハ、ハ、ハ、と何處へ往くね、傳へ聞く水神の植半か八百松か』『どこでも貴方の御随意、早くまわりませう』『ちやア少し急ぐが宜い、うるさい前の俗物は僕が蹴飛ばして行くから』『あれ亂暴をなすツちやアいけませんよ』『心配無用、唯そツと怪我のないやうに押し退けて通る意味だよ』

押し返すが如き群集を物ともせず、両肩を峙て反身となつて足早に打通れば、いづれも驚き呆れて自然に片寄る中より、また酒の勇氣を假つて梢の花もろとも喧嘩の花に誇らむとする曲物、上田が人一倍の大兵を面白き敵と見て、やい畜生奴ふざけた事をするなといはせも果



てず、無言に其肩口ぐいと掴んで天生の大力に押し遣れば、手鞠の如く跳ね飛ばされて大地に伏し顛ぶを、見返りもせず悠々と行く背後には、川上の妻女とお清が頻りに氣を揉みつゝ、やうく梅若の社内に入るや否、額の汗を拭ひながら、ほつと息をつきぬ、

『まア上田さん、酷い事をなさるよ、かはいさうに、今の人は怪我でもしては居りますまいか』『ハ、、、、あれが所謂遊び人とか破落漢とか稱する奴で、よく人に喧嘩を吹っかけて何か自己の爲にする難物だから、わざと仕てやツたのさ、時に梅若は此處だが』『ちやア植半へ這入りませう、しかし上田さん、定めし今日はお客も大勢でせうから、貴方、おとなしく仕て下さいよ、もし間違ひでも出来ますと女二人て困りますから』『ハ、、、、よつしい、僕だつて其邊に如才はないです、ところで馬鹿念を押すやうですか、財政は確乎ですか』『ホホ、、、、それこそ御心配に及びません、何でも貴方お好み次第のものを澤山とりよせて、

これで宜いと仰しやるまで召し上れよ』『さうですか、しかし幾何ほど持つて居なさるね』『あらまア、阿しな事を、人が聞きますよ』『だつて其邊を確認めて置かないと聊か不安心だ、幾何です、いくら』『ホ、、、、二三十圓は御坐いますよ』『二三十圓、そいつア確乎すぎるほどだ、ぢやア安心して這入りますぜ、おやお清君、君よろしく萬事を處理し給へ、料理屋などへ這入つて奥様みづから馳走の注文や金銭の勘定をしちやア品位に關するからね』『おやおや怖しいもんですわ、上田さんでも斯うなると、お世辭を知つて在らツしやるから』『お世辭だ、馬鹿め、下女風情が知るところでない、黙つてろ』

前途みずの一文なしに飛び込んで百金の豪奢を恣にするべき容貌ながら、さて斯る事には小心翼々たる上田が天生、こゝに二三十圓と聞いて俄に肩を怒らせつゝ、おのれ眞先に植半の玄關へ威張り込む背後より、水際たちし川上の妻女とお清、夫婦づれの下女附添とは盲目も見

違はざる不権衡なれど、あまりの傲然たる體に書生とも思はれず、出迎への女中いづれも眉を擧めて怪しみぬ、

樹立の隙間より隅田川を見渡す裏座敷の離れ家に、まづ上田が今日の上客として床の前に會釋もなき大胡坐、川上の妻女と清が其左右に並びぬ、『さア上田さん、今日は貴方おもふ存分の御注文をなすつて嫌といふほど召上つて下さい、妾と清が御給仕を致しますから』『や恐縮々々、ぢやア無遠慮に沈著いて遣つつけますぜ、しかし今日は實に妙でしたよ、元來、僕は御承知の一癖もんで、白晝雜沓の花見などいふ事は別して大の禁物、これまで決して出た事のない男ですがね、今朝に限つて何だか頻りに家外へ出たくなつて氣が向いたから、つい、うかくと遣つて來たんです、ところが豈圖らむやで、つまり蟲が知らせたんですね、思ひもよらず唐突に斯んな御馳走たア、ハ、ハ、ハ、ハ、お清君どうだ、ちと面白い談話でもしな

欠

# 欠

まぐの人間が集つて日夜いろくの面白事がありましたよ、ハ、ハ、ハ、ハ、」  
をりしも運び来りし料理の七分まで上田が注文の品々、會釋もなく自己が膝前に引き寄せて  
大盃をあけながら「や、うまいぞ、なかく飲めるわい、細君、一杯あけませうかね、お清  
君どうだ、遠慮するに及ばんぜ、どしどし詰め込むが宜い、折角の馳走だ、肴は骨を舐つて  
白く瘦せるまで酒は瓶子を倒にして、雫も餘さるの覺悟さ」あれ上田さん、澤山とりかへ  
て御注文なさいよ、ねエ清」さうで御坐いますとも、第一お肴の骨まで噛りついては外聞が  
悪い、少しは犬の喜ぶぐらゐに」こら下女また餘計な事を吐す、そもく魚は肉よりも皮と  
骨とに味ひのあるもんだ、酒は將に盡きむとする一刹那が甘露だ」おやくく妙ですことね、  
なるほど皮に味はあるかも知れませんが、まさか骨に、上田さん骨は固くつて人間の食へる  
もんぢやア御坐いませんよ」食へる、固くない」ぢやア喰べて御覽なさい」あれ清、およ

しよ、つまらない事を」『だって貴方、あんな分らない強情をいふ人ですから、骨の食べ工合を拜見いたしますの、これこそ淺草の公園でも見られない藝ですよ、ホ、ホ、ホ、』『や此女め、いよく向ッて来るな、よし、ぢやア骨の食ひ鹽梅を見せてやる、謹んで見物しろ』いふや否、鯛の焼物皿を取上げて兩眼くわツと見開きながら、むしやくくと肉を喰ひし後、ばりばりと其骨を音高く噛みいだせば、さすがの二女あツと呆れて思はず顔を見合はせぬ、

『ハ、ハ、ハ、なるほど、あんまり甘くないもんだね、實は骨の附際にある味といふべきところを、あやまつて唯だ骨と言ッたのさ、しかし下女風情に言ひ込められて謝るのも残念だから我慢して噛りついたもの、いや固かつたよ、まして鯛の骨といふ奴はね、おや、咽喉が變だぜ、妙な心持がするぞ、はてな、む、ウ、えへんく、こいつア少々まるツた』『それ御覽なさい、だから、およしなさいと申しましたに、第一お清が悪いよ、つまらない事を、も

し小骨でも咽喉へ引ッかゝツて居るのぢやア御坐いませんか』『いえ 妾も悪いが上田さんもまた無法な方ですよ、骨が食へる固くないなんて、しかし眞實どうかなさいましたの、もし小骨なら貴方、御飯の小塊を丸呑にして御覽なさい、お脊中でも叩きませうか、お湯か水でも』『いや大丈夫、別條はない、が、ちと呵しいよ、えへんく、あツぶく』

入相の鐘に花よりも人まづ散り失せて、さしも雑沓せし向島の土堤に人影ちらほら、春の生命ともいふべき此夕暮の景色を打捨て、あれほどの人浪うちし馬鹿もの奴いづこへ消えて無くなりしぞ、いよく俗物の本體を現しけりと上田先生、に陶然として二女を伴ひつゝ、梅若を立出で、白髯の社頭まで来りし折しも、葎賣張の懸茶屋に残りし三四人の客に對うて軒に立ちながらの古三味線、編笠ふかく面を包めど唄ふ聲の調子といひ、すツと立ちし

後姿の柳腰、どこやらに目標ある筈と見れば、結べる帯の端に豫て覚えの模様、さては正しく其女、嗚呼まだ斯る業をしをるか、させをるかと思はず涙ぐんで足を停むれば、お清それとも知らず袖を曳いて、『上田さん、御酒の機嫌で浮かれては困りますよ、第一が唄なぞ聴く柄ですか貴方は、さア早く歸りませう』『いや、ちよいと待ってくれ、あの女、いかにも哀れだ』『おや、おやく、妙な事を仰しやるわ』『だって可愛さうちやアないか、一年一度の人が楽しむ春の花を其身が露命の種として、あゝ唄ひたくもあるまい、時に妻君、金を五圓ばかり下さらないか、あの、あの女に遣りたいんです』『五圓、いえさ、お金は五圓でも十圓でも此處にあるだけ差上げますがね、何も貴方、あんな女に五圓も』『そりやアさうですがね、あれも、貴方も、同じこつてすよ、身分こそ違へ、もし良人を持つて居るとしてみれば、ね、たゞ貴方は幸ひにして紳士の家に生れ俊秀の才士を良人に持ちしがため、あれなんざア貧

家に生れて厄介な男を持つてゐる女でせうさ、可哀さうに、下さい、僕に下さい、彼女に遣ると思やア何だか酔狂のやうですが、僕に、上田力に下されば貴方、さのみ腹も立ちますまい、おいこら下女、何だ傍から呵しな目をむき出しやアがッて、控へろ、黙って引ッ込め、其面を』

強ひて奪ふが如く五圓紙幣一枚を貰ひながら、驚き怪しむ二女に目もくれず、袂より皺くちやの反故を取出して小さく包みつゝ、そつと立寄りて今しも弾ける三味線の駒に挿めば、音じめ忽ち狂うて驚く編笠、さらぬも花の下の夕暮、たしかに此方を見るの違なく身を翻して遁ぐるが如く走せ戻りながら、『さア歸らう、ちと足早に歸りませう』

其四

本所の奥の鯛井戸村に水呑百姓の住み荒せし家を借り受けて、浮世を忍ぶ涙の宿としなが

ら死しても忘れ難き友情の百金はあれども、これぞ良人の疾病を養ふべき醫藥の外には、一錢も費さじとて妻が袖を同然の果敢なさを、残る良人は猶更ら男泣きの夕暮、やうく火を點して待ちわぶる折しも、古三味線を抱へて歸り來りぬ、

世は春の空ながら、こゝのみは秋の風、誰が植ゑし形見か背門の籬根に咲ける櫻の花の一輪二輪、窓より散り込みて病める枕頭に落つるも涙の種、歸りし妻が古拾の袖に誰が悪戯ぞ注ぎし酒の香の残るも涙の種、夫婦の目よりも燈火またゝいて一入ものゝ哀れを催しぬ、

『はい今、歸りましたよ』『お、歸ったか、さぞ草臥れたらう、さア早く茶漬でも掻ッ込んでくれ、今日は乃公もね、よほど気分が良クッて家の周圍を五六度も運動してみたよ、この分ちやアもう大丈夫、こゝ一二ヶ月も経てば全快するだらう』『おや、さうですか、そりやア何より嬉しいこッてすが、あまりまた輕舉しちやアいけませんよ、兎角この病氣といふものは癒

際が大事ですから』『いや、そう思つて用心はしてるがね、この頃のやうに空は長閑だし花は咲くし段々と病氣も薄らいで来るし、動ともすると寢て居られないよ、何だか氣が勇んで、おい黒田いつまで横になつてるんだ、早く起きて世に出ると、頻りに呼び出すものがあるやうな心持がしてねエ、ハ、ハ、ハ、ハ、『それくゝそこですよ、その氣になつたのが病氣の退際ですから、今が大切の時、やり損つちやア取返しになりませんよ、時に良人、今日また、あの上田さんになね』『え、逢つたア、どこで』『向島でさ、實に妾も面目ないやら氣の毒やらで、しみく嫌になりましたわ斯んな淺ましい事をするのは、もうくゝ明日から三味線を叩き折つて廢めにしたいことよ、兎角この古三味線があるから藝が助ける薄倅の文句で、手内職するよりはと、つい恥も絲瓜も構はない氣になつてさ、それも大恩のお金を一文でも外の事に費ツちやア、實に濟まないといふ心からですがねエ』『む、さうかい、や、さても儲も何の因縁

あつて我々夫婦は斯くまで上田一人を苦しめるんだらう、世の中も廣し人も多いにねエ」「しかし良人、今日の上田さんは不思議でしたよ」「何故、どうして」「何故って良人、あの上田さんがね、立派な奥さんと下女を連れて、しかも微醉機嫌ですの、自分の服装こそ例の通り萬事うつつちやりの構はず屋ですが」「上田が、妻と下女を、あの上田が、連れて居たア」「それがさ、その奥さんがね、容色といひ姿といひ衣裳といひ、あんまり立派に揃ひ過ぎて居ますから、はてな、他人かとも思ひましたがね、そつと後から見え隠れに付いて様子を窺ひますと、なか／＼他人行儀ではないの、御自分が眞先に立って例の肩で風を切る勢ひの後から、さも馴れ／＼しう娯樂さうに、くつついてね、何か頻りに嬉しさうな笑談の工合、下女も良人、きのふ今日の召使ぢやアないやうですよ」「や、そいつア驚いた、殆ど神武以来の椿事と謂つても宜いくらゐるのこつた、して和女、どういふ工合で上田に逢つた」「それがね、白髯の

掛茶屋で、彈いて居ましたの、すると背後から不意に三味線の駒へ紙屑の捻つたのを挿んだ人があつて音じめの狂ふ途端、はつと思つて笠越しに見ましたが、夕暮の軒端でもあるし、また其まゝ直ぐ遁け出したやうですから、しつかり分りませんが、思はず振り返つた時、あの人並すぐれた大きい身體ですもの、一目に其人と知つた折の面目なさ、實に穴へ這入りたいやうでしたよ、よくあるこつて花見客の悪戯かと思つた紙屑も、上田さんと知つた以上は其まゝ押戴いて帯の間に挿み、駈け出しながらも櫻の根を小盾に取つて見送ると、今いつた通りですの、お言葉を掛けるにも掛けられず、さりとて淺ましい此さまを見て、嗚呼まだ斯んな事をして居るか、馬鹿はいつまでも馬鹿だと思はれはしないかと、恥かしくつて口惜しくつて良人、編笠の中で思ひきり泣きましたよ」「む、ウ、もう乃公も言葉がない、たゞ和女に對して、いかにも氣の毒だ」「え、またそんな事は、どうでも宜いが、あとで紙屑の中を見ま

すとね良人、五圓紙幣が一枚』して和女、その紙屑は、どうした』「こゝに持つて居りますよ、どうせ上田さんが書き捨ての反故に相違ないから、これも我々夫婦がために恩人の記念、ながく大事に仕舞って置きたいと思つて』「そりやアよく氣がついた、さうなくツちやならないところだ、しかし、ちよいと其反故を見せよ、何が書いてあるか』

反故を廣げ皺を伸べて燈火の下に見れば、徒然の何心なき筆の跡、一枚の半紙を縦横無盡の墨まっくろになるまで、さらに際立ちたる文字なく讀み難けれど、筆勢の餘りし紙の端に黒田健次といふ四字あり、はつと思つて猶よく見れば、また其傍らに可憐の妻とありて、憐慘、悲哀、病苦、痛傷、扶助の途などの文字おのづから聯りたれば、流石の健次おもはず身を震はして涙を含みぬ、

嗚呼この反故これを我に送り我に見せむとの業ならず、唯たま〜其袂より探り出せしも

のならむに、いたづらの徒然書にさへ斯くまで我を思ひ妻を憐れむの文字、おのづから其真情の溢れ出でしかと、俄に容を改めて膝前に差置きながら、今、和女の談話でみると、かの七十圓といひ小袖といひ三度目の百圓も、なるほど、他人に頼らずして送れる筈だ、ついで例の探偵一件も、いよく物の間違ひといふ事が分つて安堵したよ、しかし上田がそんな妻を持つて、下女を連れて、悠々と花見に出掛けるほどになるたア、夢にも思はれない、奇だ、怪だ、どうも不思議だ、とはいふもの、奇怪ふしぎと思ふのが即ち乃公の過誤で、多年の間、與みし易き愚直一片の人物と輕んじた彼は寧ろ我よりも俊秀の才機で、また茫として何事にも關せざるか如き裡に、おのづから浮世に對する腕まで遙か勝つて居たのだらう、嗚呼それにつけても和女には實に濟まないこつた、曾ては同じ一つ鍋のものを喰ひ合つた友達同士が、結句の智愚と成敗を倒まにして、我こゝに過分の妻を持ちながら其妻に袖乞の古



三味線を弾かせて露命を繋ぐ浅ましき、それに引替へて彼は三春の行樂を追ひながら其妻を飾り其妻を慰めて、しかも同じ土地の同じ花の下で、恩を送る境遇と恩をうけて恥かしさに泣く境遇、いやもう何とも言ひなした、なまなか病氣の良くなるのも却つて苦痛を増すの基だ、ねエお島、なぜ和女は斯んな不幸な男を持つたんだよ』『ホ、ホ、ホ、また始つたよ、良人にも似合はない愚癡が、よし眞實あれが上田さんの奥さんにしたところが、なんですよ、意氣地のない、人間は七顛び八起きといふ世諺があるぢやアありませんか、しつかりなさいよ、馬鹿々々しい、どうかすると直ぐ此ごろは、お泣きなされるんだよ、病氣の故かも知れないが』『泣くさ、これが和女、笑つて居られるもんかね』『泣蟲、男らしうもない、泣いて事が済むなら、妾こそ今まで出した涙で立派な庫が立ちますよ、傾城の何とやらぢやアないが』『あア黒田健次の死せざるは妻あるが故だ、我々夫婦の未だ世に存するは上田力あるがためだ、

この妻と、この友と』『この妻と、この友よりも、この病と此家を早く忘れる工夫が肝要ですよ』『よし、心得た、上田にして猶かつ聞くが如き境遇ありとせばだ、我こゝに衰へたりと雖も、む、ウ』『それく、その呻り聲が男の舞臺ですよ、もつと良人しつかり呻つて下さいよ』『ハ、ハ、ハ、病中あんまり呻ると、まだ少々苦しいよ』『ホ、ホ、ホ、さうでしたね、ぢやア妾が代理に呻りませうか、それ、お聴きなさいよ、む、ウ、む、ウ、お、苦しい』

其五

日は花に没し人は家に歸りし黄昏時、向島の小梅橋より車に乗らむとせし二女を叱しながら愚な事をいふべからず、花見の歸途に車とは鰻を食ひ飽きた後で天ぶらの山盛と一般、俗中の俗なるものだ、まして食後の満腹を奈何せむ、いざ勇を鼓して歩むべし、歩むべしと上田みづから先登に立ち、疲れ果てたる二女を伴うて河岸傳ひに兩國橋を渡り、やがて濱町の富

田家に歸りしころは夜の九時を過ぎぬ、

『あれ上田さん、まア貴方お這入りなさいましょ』『いや、こゝまで送り届けたから僕の役目は濟んだ、もう安心した、川上に宜しう』『だって折角、是非お上り遊ばせよ、今から貴方お歸りなすったって、お一人で別に仕方は御坐いますまい』『親兄弟あるでなし妻子眷族あるでなし、將また我を待つ友なく貯蓄の財なく珍器なく常食なく、茶なし菓子なし心配なし、あるものは米が四升あまりと鹽が三四合に醬油が一合半、金山寺味噌が價六錢分、前夜の乾魚は鼠に仕てやられたかも知れず、聊かホヤに異状のある豆ランプと脚の曲った机、一脚襟垢のついた木綿衣具が上下一枚、枕一個、マツチ三四個、茶碗箸皿小鉢の類が一人前やうやう、口の缺けた土瓶と手の取れた土鍋と杉板の箱火鉢と、まてくまだある筈だ、おツと忘れた横町の湯札が六枚ばかり』『おやまア大變な御身代ですな、しかし階下に宿の夫婦が居る

といふこつてすから、まさか盜賊の御心配も御坐いますまい、ねエ清』『ホ、、、盜賊が先方で用心いたしますよ、誰かに聞いた談話ですが、上田さんのやうな方の住家へ盜賊が這入ったと思召せ、すると家内中を掻き探したって何も取るものが御坐いますまい、そこで盜賊が寐て居る主人を揺り起しながら、おい／＼ちつたア恥を知れと言つて出て行きましたさうで』『こら家鴨、また乃公を輕んじをる、しかし面白い談話だ、なるほど、人間も盜賊に恥を知れといはれるやうになつちやア聊か心細いね、殆ど滑稽だ、ハ、、、』  
奥までも響き渡る玄關前の高笑ひは、正しく其人と知つて川上みづから出で來りしかば、今更ら歸つて用なき身の我家も同然の心地して、さらば酔醒の水でも茶でも賜ふべしと、上田先生またこゝに臂を落ち付けぬ、

『やア川上、君に感謝する、今日はね、ふと氣が進んで向島の花見と出掛けたのさ、すると

思はず細君に出逢ったから、つい一言二言の果が御馳走となつて、植半の料理した、かの満腹、實に近來の快だった』『そりやア相方よかつた、しかし、わざ／＼送つてくれて恐縮だね、どうだ、飲み直しでもするかね』『いや、もう飲めない、飲めば飲めるがね、此上に飲んぢやア却つて興を損じ快を破るの基因だ、ハ、ハ、ハ、もし更に御意あらば寧ろ茶菓の饗應にあづかりたい、人體にない事をいふやうだが、雨後の明月と一般、酒後の甘味といふもなアまた格別だぜ』『ハ、ハ、ハ、お易いこつた、お誰か菓子を持つて來い、羊羹が宜からう』『羊羹々々、羊羹に限る、そいつアますます妙だ』『雨風の天關、流石は體格だけのことあつて、いつもながら相變らず壯だ、時に今日、向島の花見で全體どんな感があつたね、君のこつたから定めし議論があるだらう、何か一種の感が浮んだらう』『ある、大にある、なか／＼大した議論もあつたがね、不意に植半の料理を詰め込んで腹の蟲を驚かした故か、忘れて仕舞

つたよ、ハ、ハ、ハ、なアに花も人も年々歳々同じこつて、別段これといふ變つた事もないがね、たゞ一事、變つたやうに思つたのは君、見渡すかぎりの人の山が面積に於て廣くなつて居ながら高さは寧ろ俄に低くなつたやうだね、まづ汐入村以來こゝに殆ど七年、その以前が五年、この東京に來てから十二年の間、年々一度も缺かさず向島へ出かけて見るがね、今日は一人も僕より背の高い奴がなかつたよ、つまり僕その者が年と共に背の伸びたからだといふだらうが、決して然らず、體量こそ年々に増えたが背は十年以來こゝに依然たる五尺八寸で、その十年以來の花見毎に向島の雑沓中を歩いて見るに、随分と中には僕よりも高い奴もあり、また僕と匹敵する奴も多いし、およそ一町を歩む間の平均數、僕に過ぎた奴が先づ一人、僕と甲乙ない奴が三人の割合で、僕の目から耳、鼻から口にかけて顔ぐらゐまでの奴が一二十人もあつたらう、それがね、年々に少くなつて一昨年の如きは殆ど豫期の半に減じ、

去年は三分一内外、今年の今日は墨堤十里の間さらに一人の及ぶものなく、いづれも肩から以下のチビ助ばかりさ、そのくせ、どうだといやア人の数が寧ろ年々に多くなつて、今日なシア歩を運ばなくつても前後左右から自然の動力に押されて進むほどの混雑で、人の山が平つたく廣くなつただけ高さが低くなつたと思ふのさ、ね君、と斯うばかりぢやア實に馬鹿氣きつた議論だが、さて沈思黙考、さらに考一考すれば其間に於て恐るべき一の社會的人生觀が浮ぶね、しかも背の寸尺ばかりでない、日夜しきりに衛生々と叫んで至るところ運動體育の大騒ぎ、其上また滋養物々々と喚きながら、體量體格の打算上すべて人間が反比例の結果で、細く青く軽く小さく骨つほくなつて來たやうだぜ、嗚呼これ果して何の現象ぞやだ、大男總身に智慧が廻りかね、小男はあるだけあつても知れたものといふ世諺は儲道いて、別に原因の存するところ機微の伏するところ、かの平凡醫者の乾燥論や模型學者の統計論を

外にして、大に攻究すべき價値があるだらうと考へる、そこで僕は僕の脳裡より一週間を期して其原因結果を生み出す覺悟だ、まづ今日の花見に依つて得たる利益は植半の料理と此問題とだ、ハ、ハ、ハ、つまらない事を饒舌つて咽喉が乾いた、茶、茶、湯でもよし、なみくと大きな器に一ぱい頼む」

川上おもはず膝を打ちぬ、その議論に感じて膝を打ちしにあらねど、のツそりとして愚なるが如く茫然として癡なるが如き上田が、偏見なれど常に事々物々一種の主義と持論を構へて叩けば叩くほど音のする爲人に感じつゝ、かねて思ひし幸ひの時なり、この機に乗じて試みむと笑を含みながら、上田が面體じつと見詰めて、「なるほど、そりやア面白い議論だね、實に感心するよ、いつ不意に問うても君は必ず何か議論を持つてるから、時に上田、僕がね、あらためて君に進める事がある、どうだ、いつまで獨身で居らるゝもんぢやアなし、妻帯して